市民ミュージアム

大野城心のふるさと館紀要

第２号

目　次

武寧王生誕伝承と加唐島	赤司　善彦	5
絵葉書の中の水城跡－近代水城跡へのまなざし－	林　潤也	17
岡山県瀬戸内市慈眼院鐘（筑紫神社旧鐘）の検討	大重　優花	33
資料紹介　王城山古墳群出土の瓶形土器	上田　龍児	51
【ふるさとラボ通信】　『北平日記』を通してみた目加田誠氏	舟山　良一	55

2022 年

大野城心のふるさと館
Onojo Cocoro-no-furusato-kan City Museum
OCCM

市民ミュージアム

大野城心のふるさと館紀要

第２号

2022 年

大野城心のふるさと館

Onojo Cocoro-no-furusato-kan City Museum

OCCM

目次

武寧王生誕伝承と加唐島
赤司　善彦……5

絵葉書の中の水城跡－近代水城跡へのまなざし－
林　潤也……17

岡山県瀬戸内市慈眼院鐘（筑紫神社旧鐘）の検討
大重　優花……33

資料紹介　王城山古墳群出土の瓶形土器
上田　龍児……51

【ふるさとラボ通信】　『北平日記』を通してみた目加田誠氏
舟山　良一……55

武寧王生誕伝承と加唐島

大野城心のふるさと館長　　赤司　善彦

はじめに

当館では開館後すぐに大韓民国国立公州大学校博物館と学術交流協定を結んでいる。かつて百済の都があった公州市にある公州大学校博物館は、公山城などの百済山城をはじめとした百済の歴史文化を研究する国立大学機関として著名である。これまでに当館とは展覧会の開催や調査研究での人的交流を重ねてきたところである。今後の共同研究として、武寧王生誕地をテーマにしたいとの提案を受けた。

実は 2009 年頃に九州国立博物館ボランティアのメンバーと武寧王生誕地とされる佐賀県唐津市の加唐島の調査を実施したことがある。現地での聞き取り、図書館等での文献調査に加えて、海上からの視認調査まで実施した。その成果は 2013 年に報告した。この時の船上からの視認調査には国立公州大学校尹龍爀前教授と徐程錫教授にも参加していただいた。（赤司他 2013）

本稿は、加唐島での武寧王生誕説話に関する共同調査が予定される中で、これまでの加唐島に関する種々の調査についてまとめたもので、公州大学校に提出したものの日本語版である。

ここで加唐島とその伝説についてふれておきたい。佐賀県唐津市の加唐島は、新鮮なイカ料理で知られる港町「呼子」の沖に浮かぶ小島である。この島には韓国の百済の王が生まれたという伝承がある。百済の王にまつわる伝説は宮崎県美郷町など他の地域にも流布しているが、この王は歴史上実在した人物である。その人物は百済中興の王とされた百済第 25 代王の武寧王である。つまり単なる伝説ではなく史料に裏付けされているというのがこの伝承の特徴である。

武寧王については『日本書紀』という日本の記録だけでなくもちろん韓国の『三国史記』をはじめ中国の史料にも登場する。ただ武寧王出生に関する記録は、韓国の史料には記載がないことから、日本側の恣意的な記述とみられていた。ところが、1971 年に韓国の公州市宋山里古墳群で武寧王陵が発見され出土した墓誌に「斯麻王（しまおう）」の名前と没年 62 歳の記載があり、『日本書紀』に登場する「嶋君」の生年と合致することや、棺に日本特産のコウヤマキが用いられていることが明らかになった。武寧王陵の古代日本との深いつながりの事実は指摘されてきたが、近年、韓国の学界ではこの各羅嶋生誕説を歴史的事実であるという見方が定着しているとみてよい。こうした状況を背景に 2002 年には佐賀県の加唐島で武寧王生誕祭が開催され、以後も日韓市民交流の強いきずなが育まれてきている。

1．武寧王生誕に関する説話

加唐島での武寧王生誕説話は『日本書紀』巻 14 雄略天皇 5（461）年条に登場する。『日本書紀』は日本最古の正史とされる史書で、その成立は 720 年である。神代（かみよ）より持統天皇退位（697 年）までの歴代天皇の系譜や事績を編年体で記している。その編纂は 7 世紀後半ごろに開始されたと考えられているが、過去の事績等については口頭伝承だけでなく、各種の文字記録等も取り入れられたとみられる。すでに 5 世紀後半には「史（ふみひと）」という書記官の存在が明らかなので、武寧王の記録も何らかの文字資料として記録されていた可能性が高い。したがって、史料批判は不可欠であるが、根拠のあいまいな言い伝えというような文脈でとらえるものではないと考えられる。

武寧王の出自と生誕に関しては以下の主な史料がある。

①『三国史記』巻 4 百済本紀　武寧王即位記

「武寧王、諱を斯麻。牟大王（東城王）の第２王子なり。身長８尺、容貌は美しく、温厚で情け深く思いやりがあり民は心を寄せて従っている。牟大王が崩御すると則位した」

②『日本書紀』巻 14 雄略天皇５年４月条

「夏四月に百済の加須利君〔蓋鹵王である〕は･･･弟の軍君〔昆支である〕に告げて、「おまえは、日本に行って天皇にお仕えしろ」と言った。軍君は「・・・君の婦を賜って、そうして後にお遣わしください」と答えた。加須利君は、ただちに妊娠した婦を軍君に娶らせて、「私の身籠った婦はもう臨月になっている。もし途中でお産をすれば、できればその子を婦と・・・いそいで国に送るようにせよ」と言った。・・・六月・・・身籠った婦が・・・筑紫の各羅嶋で子を生んだ。そこで、この子を名づけて嶋君といった。ここに、軍君は、ただちに婦と同じ船で嶋君を国に送った。これが武寧王である。百済人はこの嶋をよんで主嶋といった。」(以下引用する『日本書紀』の記事は、井上 1987 による。)

③『日本書紀』巻 16 武烈天皇４年是歳条

「百済新撰によると、末多王は、無道であって、百姓に暴虐を働いていた。国人は、ともに王を除き、武寧王を立てた。諱は斯麻王という。これは琨支王子の子である。つまり末多王の異母兄である。琨支は倭に参った。時に、筑紫嶋に至って、斯麻王を生んだ。嶋より送還した。・・・嶋で産まれたので、(斯麻と)名づけたのである。いま、各羅の海中に主嶋がある。王が産まれた嶋である。そこで、百済人は、号して主嶋としたという。･･･嶋王は、蓋鹵王の子である。末多王は、琨支王の子である。これを異母兄というのは、未だ詳らかではない」

①では武寧王を百済第 24 代東城王の第２子という。『三国史記』百済本紀巻４東城王即位記に東城王は琨支王の子で文周王の弟と記されている。つまり武寧王は琨支王の孫にあたることになる。しかし②では武寧王は蓋鹵王の子であると記す。ところが③では武寧王を琨支王の子で、末多王（東城王）の異母弟と記す。

このように第 24 代東城王の子、次いで琨支王の子、そして第 21 代蓋鹵王の子と３つの説があることになる。武寧王は 502 年に暗殺された東城王の後を継いで 42 歳で第 25 代百済王に即位したのであるが、その幼年から青年期に関しての記述は残されていない。

武寧王陵出土墓誌石　長い間、日本側の武寧王生誕に関する史料は恣意的な記述と見られていたが、1971 年に韓国の公州市宋山里古墳群で武寧王陵が発見されたことを契機に大きく見方が変化したのである。それは王陵で発見された墓誌石に「寧東大将軍百済斯麻王　年六十二歳　癸卯年五月丙戌朔七日壬辰崩・・・」つまり「寧東大将軍の百済の斯麻王は、年 62 歳で癸卯年（523 年）5 月 (朔日は丙戌) 壬辰日の７日に崩御した」という「斯麻王」の名前と没年 62 歳の記載があったからである。

この墓誌の内容は②に記された雄略天皇５(461)年の「嶋君」の生年と合致することから、『日本書紀』の記述は信憑性が高いとする論文が相次いで発表された。文暻鉉氏は、本国史料の『三国史記』と日本側史料を対比検討して『日本書紀』と『百済新撰』に記載された武寧王の記事は、信憑性を認める見解を示し、武寧王の世系出自を『三国史記』に載せられた東城王の第二子ではなく、『日本書紀』の記載のように蓋鹵王の息子と結論している（文 2000)。

さらに、加唐島を現地調査し武寧王の誕生地と伝説が現在まで伝えられており史実と一致していると記し、崑支王子と蓋鹵王兄弟の間に夫人の譲与が行われたという記事は、百済前代の扶余族に残存した古代習俗の一端であるとみている。

２．加唐島の概要

加唐島の地理と地質　加唐島は佐賀県鎮西町加唐島に所在する玄界灘に浮かぶ玄海諸島７島の一つである。福岡国際空港からは西に直線距離で 55 ㎞ほど離れており、島へは陸路で唐津市呼子港まで向かい、一日４便の呼子港と加唐島漁港を結ぶ定期船を利用し片道 15 分ほどで島に渡ることができる。距離にすると呼子港とは６㎞ほど離れ

ている。

北方の海上には壱岐のかすんだ島影を眺めることができ、秋晴れの視界が開けた日には対馬の南端が見えることもあるという。

壱岐と対馬が最短で約 50㎞、対馬と釜山も約 50㎞の位置にある。そのため『三国志』「魏書」東夷伝倭人条に対馬・壱岐そして末蘆国と記されているように、韓半島から島伝いに渡海すると、九州の最初の上陸地点が現代の唐津市を含めた松浦半島ということになる。その海路の中に加唐島があったことを想定できる。

加唐島は東松浦半島先端の波戸岬から約３ｋｍ離れ、東に 2.5㎞離れて小川島、西に１㎞離れて松島が並んでいる。（図１）

地質と地形　東松浦半島は花崗岩の基盤岩類が不整合に覆っているが、数百万年前の火山活動によって噴出した玄武岩類が溶岩台地を形成している。そのため多くが 200m 以下の丘陵性の台地で、いわゆる「上場」台地と呼ばれている。加唐島や周辺の島はこの本来は半島と一体となって玄武岩台地の延長線上にあり、各島とも玄武岩に覆われている。加唐島の周囲も高さ数十ｍを超える切り立った海蝕崖に囲まれ、中央部はやや起伏のある玄武岩の台地からなる。島の面積は 2.84㎢、周囲は 14.6㎞で、南北方向に 3.2㎞と細長くタツノオトシゴの形状に近い。島の入江は東に１か所、西に３か所認められる（鎮西町 1998）。

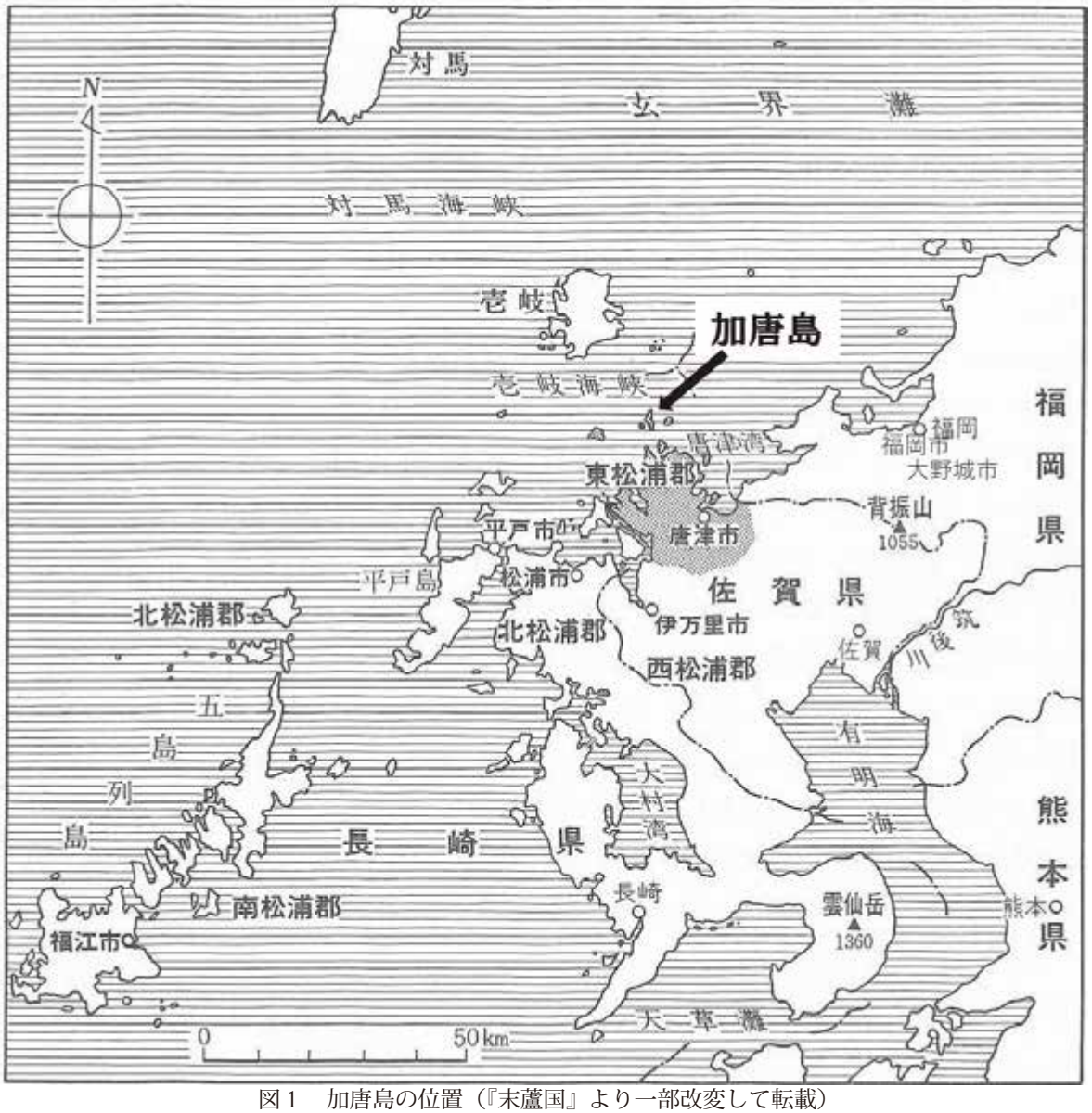


図１　加唐島の位置（『末蘆国』より一部改変して転載）

島の集落　南北に長いことから島の北東の大泊漁港と南端の加唐島漁港の２つの港が設置され、近辺には集落が形成されている。人口は 114 人 59 世帯（2022 年３月１日現在）であり、1960 年の 566 人をピークに人口減少が続いている。とりわけ漁業世帯の減少が著しい。産業としては島には古くから椿が島全体を覆うように自生していたとされるほどであるが、島民グループによって純度 100％の椿油が製造販売されている。

加唐島の遺跡　近年まで遺跡の存在は知られていなかった。昔採集された石鏃が加唐島小・中学校に保管されていたのが唯一の手がかりであった。1981 年に唐津湾周辺遺跡調査委員会による唐津市と東松浦郡の現地調査を含めて考古学的な調査を実施し、その成果が刊行されている（唐津湾周辺遺跡調査会 1982）。その成果を以下に紹介する。

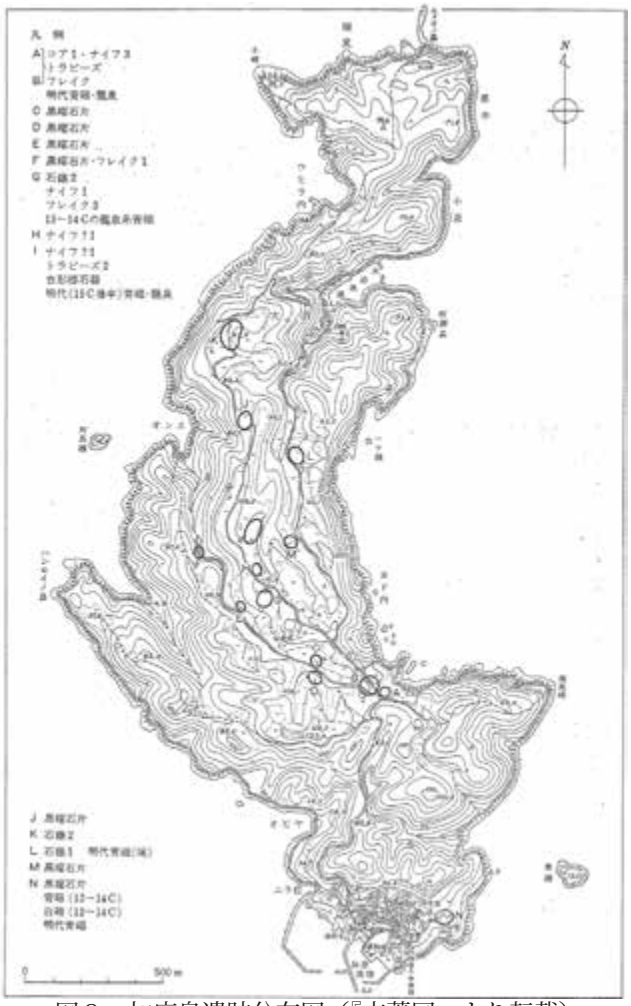


図２　加唐島遺跡分布図（『末蘆国』より転載）

島内の畑地等での踏査によると、旧石器時代では、ナイフ形石器等の遺物を４地点で採集している。ナイフ形石器文化終末頃とみられる。縄文時代（新石器時代）は石鏃３点や黒曜石片が採集されているが散布はまばらであることから、文化層（遺物包含層）はすでに流失している可能性が高い。このほかには 12 ～ 14 世紀の中国製陶磁器が採集されているのみである。弥生時代（元三国時代）や武寧王と関係する古墳時代（三国時代）については不明である。将来には本格的な分布調査が必要であろう。（図２）

加唐島の地名の由来　加唐島は現在「カカラ」と呼ばれているが、720 年の『日本書紀』雄略天皇５年４月条には「各羅嶋」と記され「カクラ」と発音されていたことになる。その後に地名が登場する史料は慶長 10（1605）年の公益財団法人鍋島報效会所蔵『慶長肥前国絵図』であるが、「賀々良島」と表記され、19 世紀に製作された伊能図も「加唐島」の表記がなされているので、すでに近世には「カカラ」の音に変わっていたことがわかる。「カクラ」を「カカラ」と発音することについて、1841 年に伊藤常足が著した『太宰管内志』には各羅島の項で、各羅は「加加良（かから）」とよむべしとする。各羅は「カクハラ」と発音していたと解釈され、「クハ」が「カ」に転じて「カカラ」となり、漢字も各羅から加唐に変化したということのようである。岐阜県の各務原市も「かかみがはらし」と読むのも同例であろう。

加唐が古代には各羅であるが、その由来は何であろうか。これについては地誌等に記されていない。報告では坂元義種氏の「各羅の各は客の省略体で、羅は多数を表す日本語の等（ら）であると考えてみると、お客（異国）さん達、立ち寄る島」という解釈がなされている。

地名の由来には、地形や災害等の自然地形に由来する場合が多いと思われる。時代が下るにつれて転訛（音がなまって別の音に変化）し、漢字表記の段階で好字（良い意味の漢字）等に変化することが多く、その地域の職業等で新たな地名が付けられて変化することもある。多いのが地名に付属して説話（昔話や伝説など）が語られることが

多い。

このように地名の由来を知ることは難しい。その大きな理由は本来の地名の意味が早くに忘れ去られていることにある。もともと地名は、他人にもすぐに理解できなければ意味をなさないのである。本来は地形に由来することが原義で、その後、同音にひっかけた解釈が創作され、それがまた伝承された可能性が高いと思われる。先に引用した事例もその典型ではないだろうか。また、和銅 6（713 年）の勅命で地名は中国に倣って 2 文字で表すようになったことも考慮する必要がある。かからの音に 2 文字の「各羅」が充てられたことから、先述したように「カク」が「カカ」に転訛したのであろう。したがって、「カクラ」の地形の意味を探ることが重要である。「カクラ」や「クラ」はえぐれたように切り立った崖地や渓谷を表している。まさに加唐島周囲の地形を形容した地名ではないだろうか。崖面に由来する「カクラ」の地名は、「カグラ」に変化しているが、東京都新宿区の神楽坂も、急な坂を神輿が通るときに神楽を奏したとされる伝承があるが、昔は急傾斜の坂道があったことから、その崖地形を表したのであろう。その他に岐阜県の十日神楽や栃木県御神楽にも「カクラ」地形から表現された後に、漢字が神楽に変化している。

このように地名の変遷が認められるが、その地形の由来からしても現在の「加唐島」が『日本書紀』の「筑紫の各羅島」であることは間違いないと考えられる。

3．島に伝わる 2 つの伝説

武寧王誕生伝説　武寧王が加唐島で生まれたという『日本書紀』の記事は、1841 年の『太宰管内志』に引用され、近代以降では 1915 年の『東松浦郡史』や 1962 年の『鎮西町史』、1972 年の『鎮西町史跡の話』に武寧王の記述が掲載されている。では、島の中で武寧王生誕譚は伝承されていたのか、またそうした伝承の記憶は記録されていたのだろうか。

1999 年に加唐島の調査を実施した文暻鉉氏は、2000 年に加唐島での武寧王生誕説を史実とした論考を著し、その根拠の一つとして、武寧王生誕にまつわる伝説が島に残っていることを挙げている（文 2000）。しかし先述したように近世以降の各種文献記録には武寧王生誕に関する引用は認められるが、伝承についての文字記録は確認できない。

民俗学者で伝承を専門にする逵志保氏は、2003 ～ 2006 年にかけて加唐島を訪問して聞き取り調査した結果、島の人たちは武寧王生誕伝説を聞いたことがなく最近のことだと聞き取っている。調査で判明したことは、1990 年代に唐津市の窯元が韓国との行き来の中で、加唐島での武寧王生誕の話を知ったことから、この話を加唐島の人に知らせて加唐島での武寧王生誕地の顕彰を思い立ったことを聞いている。そして 1999 年 3 月に武寧王生誕の顕彰碑を加唐島に建立する発起人会が結成されていることに注目し、少なくとも顕彰しようとした人は島外の人だったことを突き止めている。「伝説というものが地域の中にだけに閉じられているのではなく、地域内外の様々な働きかけによって、機能していく様態として捉えることができる。」と記す（逵 2005）。文暻鉉氏がこの地を訪れたのは、ちょうどこうした顕彰の動きが活発化してきた頃だったので、武寧王生誕伝説を耳にする機会があったことは想像に難くない。

プロジェクトチームも島の人たちへの聞き取り調査を実施している。2013 年 12 月の島の老人会での聞き取り調査で、伝説が昔からあったと答えた人が 11 人中 10 人で、小さい頃に韓国の偉い人（王様）が生まれたと聞かされたという。そのうち 9 人が祖父母からで、1 人が先生からだという。これはとても実りある成果で、70 歳代の祖父母と言うことであれば、まちがいなく 100 年以上前から島で伝説が語り継がれていたことになる。

また、生誕話の場所についてはオビヤ浦だと答えたということである。しかも「洞窟で何日か過ごした」・「涌き水を産湯にした」と聞いた人もいる。気になるのはオビヤ浦には神功皇后伝説も

あったという証言である。

神功皇后伝説　民俗学者の坪井洋文が 1952 年に加唐島で行った調査で、「加唐島にはオビヤ浦という浜がある。昔神功皇后が新羅遠征の途中で、この浦に立ち寄って腹帯をとり行われたという。」という伝承を記している（坪井 1988）。また、民俗学者で地名研究でも知られる谷川健一は、武寧王出生の謎を解くために加唐島に渡った際に、渡船中に島の人に加唐島の伝説を聞いている。「神功皇后が新羅を討伐するとき、当時妊っていた皇后は加唐島で着帯式を挙げた。帯祝いのあった浦は、今はオビヤガ浦という地名となって残っている」という話を掲載しているが、同様の記述は『新版鎮西町史』にも掲載されている（谷川 1994）。

『日本書紀』でこの伝承に関する話は次のようなものである。巻９の「時に、たまたま皇后の御臨月に当たっていた。皇后は、そこで石をお取りになり、腰にさしはさまれて、お祈りして、「事がおわって、帰還した日に、ここで産まれますように」と仰せられた。その石は、いま伊覩県（いとのあがた）の道のほとりにある」というくだりと、「皇后は新羅よりお帰りになった。十二月戊戌の朔辛亥に、誉田天皇を筑紫でお生みになった。そこで時の人は、そのお生みになったところを名づけて宇瀰（うみ）といった。」である。加唐島での帯祝いについての記述はない。したがって、あくまでも伝承である。

「帯祝い」とは、妊娠５ヶ月の妊婦に白もしくは紅白の腹帯を巻いて、お腹の子供の成長を願い安産を祈願する儀礼で、地方によっては３ヶ月目あるいは７ヶ月目に行うところもある。帯掛け・帯締めと呼ぶところもある。現在日本ではあまり見かけず、形骸化していると思うが、その歴史は古く神功皇后が懐妊した際に帯を締めた事に由来するという説もあり、皇室行事の一つとして女性皇族が懐妊された場合には「着帯の儀」が古来より執り行われている。

オビヤ浦と産屋　出産に際して産婦がこもる小屋を「産屋」と呼ぶが、地域によっては「オビヤ」・「オブヤ」と訛って呼んでいる。谷川健一は先述の帯屋祝いのあったオビヤガ浦について「もとはといえば、百済の武寧王の出生にまつわる伝説に誘発されてできたものにちがいない・・・この加唐島にもかつて産屋があったのではなかろうかと想像したくなる」と記す。先述の坪井洋文の調査によると帯祝いはなされていたようで、産屋は本家（一族の中心となる家）の一室があてられていたようである。それ以前のことは分からないが、古代には集落から離れた場所に産屋を作る風習があったので、もしかしたらオビヤ浦にかつての産屋の伝承があったのかもしれない。

一方で、地名の由来は自然地形に源を発することが多いので、オビヤの場合には帯のように長い入り江の谷地形から命名され、その後に産屋伝承が重なった可能性も考えておくべきであろう。

写真１　海から見たオビヤ浦

この２つの伝説だが、加唐島での武寧王生誕については、『日本書紀』に記録されているが、島で伝承されてきたという古い記録はない。現在伝説として伝承されていたようだが、どこまでさかのぼるのか確認できないのである。一方の神功皇后が加唐島で帯祝いを行ったという話は文献記録にないが、伝承されていたという古い記録は残されている。つまり、武寧王生誕は記録された歴史であり、神功皇后の帯祝いは伝承だということになるが、武寧王生誕について伝承されていなかったとはいえないのが結論である。さらに、仮に伝承されていたとしてもどこまで遡るのかは記録にないので判断できない。本来いつ頃から島に人が住み始めていたのかもよく分かっていない。近世に人が居たことは『松浦古来略伝記』に「津守無足弐人　足軽弐人」と記録されていることが

分かるだけである。果たして自給自足による定住が可能だったのかどうかも定かでない。歯切れが悪い結論となったが、伝承が否定されはしないということである。なお、プロジェクトの聞き取り調査では、加唐島だけでなく周辺の馬渡島と小川島についても実施している。馬渡島には神功皇后伝説を確認できたが、武寧王生誕伝説については、両島とも近年聞いたことがあるということだった。このように周辺の他の島では伝承がなかったとみられる。

4．海から見た加唐島

福岡県糸島説　『日本書紀』の各羅島の所在については、加唐島以外に 1899 年の『大日本通史』には各羅島を筑前志摩郡韓良志麻と記している。志麻は加唐島のある唐津湾と博多湾の間にある糸島半島の地名で、『魏志倭人伝』で知られる「伊都国」に接した「斯馬国」のことで、かつては島状の地形をなしていたが、後に河川の堆積で繋がっている。この「しま」は志麻・斯馬・斯摩・島などの漢字が充てられている。歴史的には、『日本書紀』推古紀 10 年に来目皇子が新羅攻撃の将軍として嶋郡に駐屯して、船舶を集めたと記されているように、朝鮮半島への足掛かりとなっていた港であり、『日本書紀』神功皇后紀によれば古代の倭国の外交は、中国の魏から百済中心主義へと転換するが、その仲介をしたのが韓半島南岸の徳淳国と交流していた斯摩宿禰であると記す。この斯摩宿禰の本拠地が志摩とされる。こうした百済との関わりを示した伝説もあることから各羅島を志摩とする説を再評価しているのであろう（志摩町 2007）。

糸島半島には弥生時代（元三国時代）の港湾遺跡である御床松原遺跡に代表されるように、古くは伊都国の外港として機能し、古代大宰府の外港が博多湾内に設置されるまでは、『日本書紀』が伝えるように倭国の主要な外港の一つと考えられる。そのため、百済一行が倭国への渡海に際して、壱岐からは無人島のような加唐島ではなく糸島半島の韓良志麻にあったとされる港を目指したとする説にも一理あると思われる。

5．倭国への渡海―加唐島かあるいは志摩郡韓良志麻を目指したのか―

加唐島あるいは志麻か、あるいは別の場所を目指したのかは、その時の船乗りにしか答えようがないのが真実であろう。できることは当時の渡海の想定から類推することである。古墳時代中期頃には大陸や韓半島との往来がかなり行われていたので、船も大型になっていたと思われる。『日本書紀』には白雉２（651）年に安芸の国で百済船を造船した記事がある。これは百済式の耐波性の高い大型の外洋船を倭国では百済船と呼んでいたのであろう。この場合も王族が乗船するのであり、外交使節にふさわしい百済船が準備されていたことが想像される。残念ながら船の構造は不明であるが、網代帆による風の利用も順風の時にはあっただろうが、基本は手で櫂を漕いで推進したと考えられる。

ただし、現在のようにエンジンの動力船であっても、荒れた海での事故は決して少なくない。古代にあっては使用した船がいかに大型船であっても、海を渡るリスクは想像以上に大きかった。当時の航海方法は陸地を常に確認しながらの沿岸航法である。沿岸を遠く離れた沖乗り航法は船が大型化して航海術も発達してからである。漕ぎ手の体力の消耗を考えると最短距離で島などの陸地を目指すことになる。実際には風向きや海流やなどの自然の力を利用するので、距離はさらに長くなり時間もかかる。

航海の季節　航海の条件として最初に考慮しなければならないのが季節である。冬の日本海は季節風で荒海が続き航海は不可能である。また、春と秋は低気圧と高気圧が交互にやってくるので、天候は安定しない。そうなると。日照時間が長く比較的天候が安定している夏場は季節風を利用するということになるが、6 月後半あたりから 7 月後半は梅雨にかかり、8 月以降には台風も頻発するので簡単には出航できない。夏場の穏やかな日よりを選ぶことが最良であろう。なにより、当時の

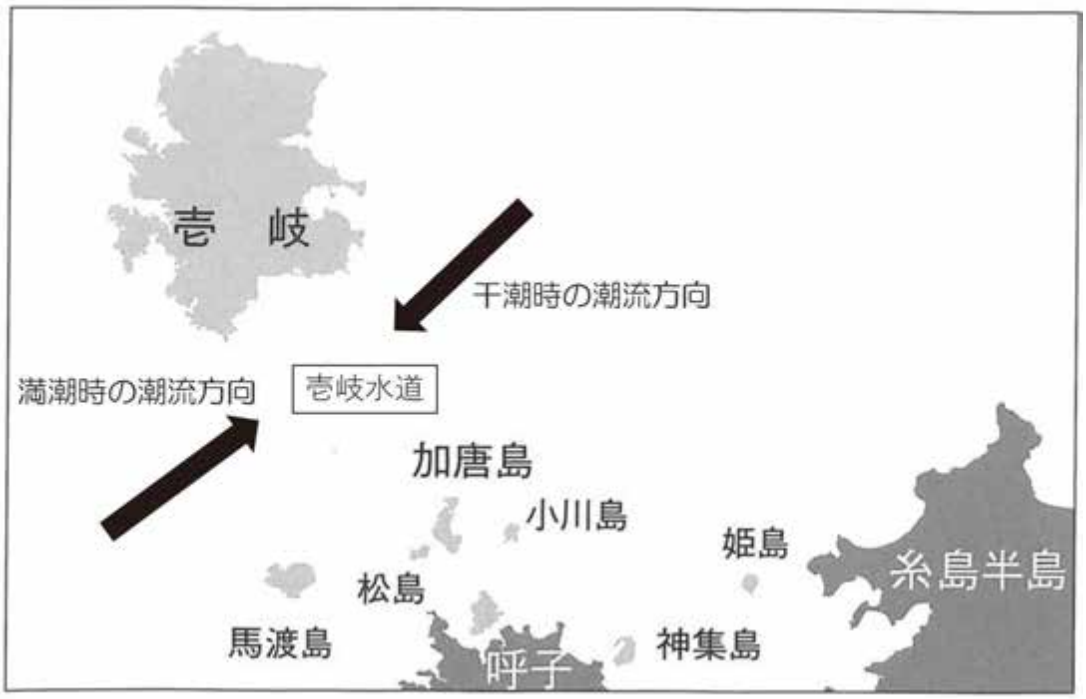


図３　壱岐水道の潮流の方向模式図

沿岸航法では夜に航海することはできない。韓半島南岸から対馬までの海峡を渡るには 60㎞前後の距離があり、８時間以上は必要である。日照時間が長いことは重要であったと思われる。

天候　次は天候である。当然ながら悪天候は問題外として、天候が良好で波穏やかなことが条件である。風向きが定まることの少ない日本海では風を利用した航行はあまり考えられない。出土土器等に帆の表現が見られるが、それは中世以降の立て帆ではない。なぜなら大きな帆柱を据える必要があるが、そのような痕跡は埴輪にも見られないからである。仮に船に帆が備えられていたとはとしても網代帆のような横帆なので、順風でなければ帆は風を受けられない。帆が５世紀代の船に張られていたのか定かでないが、手漕ぎの場合でも順風で波に乗ると速力が増すことは明らかであろう。

海流　対馬海峡では冬は北もしくは北西の風、夏は北東の風が多いようであるが、日々刻々と風向きや波高は変化するので見極めるのは簡単ではなかったと思われる。やはり最後の頼みは海の流れに乗ることであろう。対馬海峡には日本海を北東に対馬海流が常時流れている。日本海沿岸に沿った流れでこれを利用した航海術があったことが『万葉集』に残されている。対馬海流の速さは人が歩くよりも少し遅い程度だとされる。そのため、対馬海流は韓半島との往来を妨げるほどの強さではないからこそ、これを横断するようにして往来することもできたと推定される。

潮流　これまであげた条件が整えば対馬海流を乗り越えて海峡を横断することができたのだろうか。漕ぎ手の体力が最後まで持続したのだろうか。現代人との体力差を考慮しても、大変過酷である。そこで、彼らが渡海する術として重要だったのが潮流であろう。対馬海峡では満潮時には南西から北東方向へ流れ、干潮時には逆に北東から南西へと流れを変えている。櫂は漕ぐためだけでなく風を受ける帆のように潮流を受ける事が可能である。潮流は時速約 0.7 ～ 1.8km なので、壱岐の東側を出港して干潮時の南西への潮流にうまくのり、櫂を漕げば日中を費やさずとも、加唐島へと辿り着くことができたはずである。つまり、船の航行からすれば加唐島を目指す方が、糸島半島を目指すより、効率よくたどり着くことができると考えられる。（図３）

武寧王の誕生日は雄略５年６月丙戌日なので、新暦だと６月 25 日（maechan.net「換暦」で変換）であり、梅雨に入る直前の大潮となることか

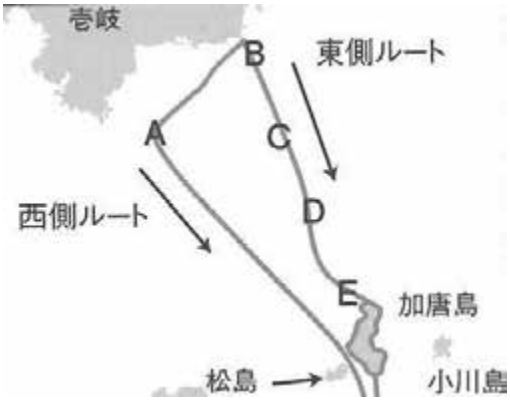


図４　船上調査のログと観測地点

写真２　海から見た加唐島

ら、渡海には最も好条件だったことになる。

実験航海　さまざまな仮定で各羅島の場所を現在の加唐島と考えたが、実際に島々や陸地は壱岐あたりからどのように見えるのか、船を出して海上から確かめることにした。2013 年 9 月 14 日に呼子港をチャーターした漁船で壱岐の沖合を目指して出航した。船にはプロジェクトメンバーに加えて、国立公州大学校の尹龍爀先生と徐程錫先生も参加していただいた。

船の通過したルート（GPS ログデータ）は、図４のとおりで、呼子港を出港した後に壱岐に船を進め、ＡとＢの地点から九州本土を眺めた。当日は青天でベタ凪である。壱岐南西沖のＡ地点とＢ地点からは遠くに霞む島影のみ視認できた。加唐島と西隣の松島と思われるがはっきりしない。Ｃ地点まで来るとぼんやりしていた島影が加唐島と松島であることがはっきりと確認できた。Ｄ地点ではさらに小川島も確認できた。ただし、それ以外の本土の姿はまだ視認できなかった。その後、加唐島の北端付近まで船を近づけたが、まだ九州本土は視認できなかった。（図４・写真２）

ところで、海上での対象物の標高Ｈｍを海面上の眼高ｈｍで視認できる最大距離Ｋ海里を求めるには、$K = 2.078 \times (\sqrt{h} + \sqrt{H})$ である（km にするには、1.85 を掛ける）（茂在 1979）。糸島半島の可也山（かやさん）は標高 365 mなので、標高 300 m あたりで最大視認距離は 74km であり、壱岐の沖から山頂が視認できることになる。もちろんこれは見渡す範囲に障害物が無く、快晴の澄んだ空気である事が条件で、あくまでも計算上である。よほど天候に恵まれた日でなければ視認は不可能であろう。

以上、実地での結果からも島伝いの沿岸航海では、壱岐から九州本土への渡海に際しては、壱岐から直接松浦半島や糸島半島を目指して船を乗り出したとしても、その姿を確認できない。しかし、加唐島は平らで横長い地形なのでランドマークとしては最適である。この壱岐沖からの実見は、加唐島が壱岐と九州本土をつなぐ重要な島であった事を確認することができた。渡海中に産気づいた婦が武寧王を生むために向かうとすれば加唐島しかないことを実感できた瞬間であった。

加唐島の上陸可能地点　加唐島の周囲は南部を除いて、ほとんどが玄界灘の荒波によって浸食された断崖絶壁の地形である。船を着ける場所を探索するために実験航海の一環で島の周囲を海から眺めた。図７はプロジェクトの成果物であるが、上陸可能な入り江は東側に⑬の大泊があり、西側に④のオンス、⑤のメンス、そして⑦のオビヤ浦がある。南側には加唐漁港と現在の集落がある。おそらく古くより港があった可能性が高いが古墳時代の状況は不明である。現在の集落を除くと水が確保できるのは大泊とオビヤ浦である。大泊には小川が流れ込み、オビヤ浦には湧水がある。この

図５　加唐島周囲の海岸線（赤司ほか 2013 より）

加唐島漁港のある地点以外では、オビヤ浦が最も有力な候補地かもしれない。（図５）

おわりに

武寧王が倭国の各羅嶋で生まれたという『日本書紀』の記録については、武寧王陵の出土の墓誌石銘文等によってその信憑性が裏付けられている。そして、各羅嶋が今日の佐賀県の加唐島だとする伝承も現地での聞き取りや民俗学の研究からも必ずしも否定できるものではなく、当時の航海術からすると加唐島に当時の一行が着岸した可能性は非常に高いと考えられた。これが現段階での武寧王生誕と加唐島について確実な証拠はないが、種々の検討を通じて得られた到達点である。

さて、この間に実施できなかった現地調査として、島内の詳細な分布調査がある。武寧王が生まれた頃にこの島に人が暮らしていたのかを探ることも重要と思われるからである。

最後に武寧王生誕をめぐる市民交流について言及したい。市民の間で加唐島での武寧王生誕についての話題が広まりはじめ、2001 年には島民が武寧王陵を訪問している。2002 年にサッカーワールドカップ日韓共同開催が行われたこともあり、この年には韓国の公州市に武寧王国際ネットワーク協議会が設けられ国際シンポジウム等を開催されている。そしてその年の６月に第１回武寧王生誕祭が加唐島で開催された。武寧王生誕祭

が回を重ねる中で「武寧王生誕地記念碑」を建立する計画が進み始めたのである。2006 年 5 月の第 5 回武寧王生誕祭の日に、この記念碑の除幕式が執り行われたのである。韓国と日本の 4 つの団体が心を一つにして建立したものだ。そこには公州大学校尹龍爀前教授等の多くの人たちの尽力があったことは言うまでもない。加唐島の武寧王生誕説話もこうした日韓の市民交流や、徐程錫館長を中心とする国立公州大学校博物館と大野城心のふるさと館との学術交流によってさらに進展することを期待したい。（写真３）

写真３　武寧王生誕地記念碑

謝辞

唐津市陣内康光氏・元韓国東洋大學校柳本照男氏には種々の協力を賜った。

【引用・参考文献】

赤司善彦・原田幸晴・芝本卓美・新谷禮子・高橋鈴子・内田小百合・西見尚子 2013「加唐島武寧王伝説の調査について」『東風西声』九州国立博物館
伊藤常足 1908『太宰管内誌』上巻（文献出版復刻 1988）
井上光貞 1987『日本書紀』中央公論社
荻野由之 1899『大日本通史』博文館（国立国会図書館デジタルコレクション）
唐津湾周辺遺跡調査会 1982『末蘆国』六興出版
小林恒夫 2016『玄界灘島嶼社会の変容―佐賀県「玄海諸島」研究―』筑波書房
佐賀県立博物館 2005『肥前風土記の世界展』
志摩町 2009『新修　志摩町史』
蘇鎮轍 2007『金石文に見る百済武寧王の世界』彩流社
田中俊明 2012「武寧王代百濟の對倭関係」『百濟文化』46 公州大学校百済文化研究所
谷川健一 1994「百済王誕生秘史」『海神の贈物』小学館
鎮西町 1962『鎮西町史』
鎮西町 1998『鎮西層（第三紀の巨木化石』
鎮西町 2001『新版鎮西町史』
鎮西町教育委員会 1978『鎮西町史跡の話』
逵志保 2005「百済王伝説－佐賀県加唐島の武寧王生誕伝説をめぐって－」『国文学　解釈と鑑賞』第 70 巻 -10 至文堂
坪井洋文 1988「佐賀県鎮西町加唐島」『離島生活の研究』国書刊行会
東松浦郡教育會 1915『東松浦郡史』（名著出版復刻 1973）
福岡県立城南高等学校郷土研究部 1967『離島調査加唐島』
武寧王交流唐津市実行委員会 2011『武寧王陵出現 40 周年記念講演会』
文暻鉉 2000「百済武寧王の出自について」『史学研究第 60 号』韓国史学会
道田豊他 2008『海の何でも小辞典』講談社
茂在寅男 1979『古代日本の航海術』小学館

絵葉書の中の水城跡

―近代水城跡へのまなざし―

林　潤也

1．はじめに

水城跡は、西暦 664 年に築造された防衛施設である。長大な土塁は、大宰府を守る城壁として平野を遮断するように配置され、1350 年の時を越えた現在でも往時の面影を残している。その威容は、古来多くの人々の目を引き付け、地域住民に親しまれてきたとともに、太宰府周辺の名所の一つであった。

近代、水城跡が地域の名所・観光地であったことを示す資料として絵葉書が挙げられる。本稿では、水城跡を題材とした明治時代後期から昭和時代前期の絵葉書に注目し、撮影場所やその年代、表記方法などの分析を通して、当時の人々が水城跡をどのように見つめていたのか考えてみたい。

2．水城の築造と認識の変化

水城跡は、福岡平野と筑後平野を繋ぐ二日市地峡帯の北端に位置する。長さ 1.2㎞、幅 80m、高さ 10m の土塁が、地峡帯を塞ぐように築造され、さらに土塁の北側（博多湾側）には幅 60m の外濠が設けられた。門は 2 カ所あり、鴻臚館（筑紫館）と大宰府を繋ぐ西門、後世まで大宰府の玄関口となる東門が設置された。

築造の契機は、白村江の戦い（663 年）の敗戦である。朝鮮半島南西部の白村江（現在の錦江河口周辺）で唐・新羅連合軍に敗れた倭（日本）は、連合軍の侵攻に備え、北部九州の防衛網を構築した。その顕著な事例が水城の築造であり、『日本書紀』天智 3 年（664 年）の条に「筑紫に大堤を築き 水を貯へしむ 名けて水城と曰ふ」と記されている。

結果的に、唐・新羅軍が来襲することはなく、水城が戦場になることはなかったが、奈良時代から平安時代にかけて、大宰府の外郭線として機能し、出会いと別れの場として和歌にも詠まれている。

鎌倉時代になると、元寇（文永の役）に関する史料の中で水城が登場する。『八幡愚童訓』によれば、元軍に押された日本軍は水城まで撤退したという。水城の様子について同書は、「水木城ト申ハ前深田ニテ路一ツアリ。…（中略）…。左右山間卅余町ヲ透シテ高クキヒシク築タリ。城戸口ニハ盤石門ヲ立タリ」と記している。『八幡愚童訓』の真実性については疑問視されているが、その記述は後世の水城のイメージに大きな影響を与えた。

戦国時代の記録としては、飯尾宗祇の『筑紫道記』が知られている。飯尾宗祇は、太宰府から博多へ向かう途中、水城を通り「過るままに大成堤あり。いはば横たわれる山の如し。尋ればこれも天智天皇のつかせゐひたるとなん。民の愁いかばかりかと思ふも悲し。」と記している。「横たわれる山の如し」の表現からは、水城が城壁として認識されていないこと、そしてその景観が現代に繋がっていることを感じさせる。

江戸時代になると、貝原益軒の『筑前国続風土記』、青柳種信の『筑前国続風土記拾遺』、奥村玉蘭の『筑前名所図会』などの地誌に取り上げられたことにより、古代の遺跡として周知され、太宰府の名所として位置づけられるようになった。また地元では、薪の伐採などを行う「里山」として利用され、大切に守り継がれてきた。

3. 絵葉書と史跡

1）名所絵葉書

わが国における絵葉書発行・流通の契機は、私

製葉書の使用が認可された明治 33（1900）年に遡る。特に明治時代後期から大正時代にかけては、精細な画像を伝達できるメディアとして隆盛を極め、その廉価性や速報性を生かして、日露戦争に代表される戦役記念絵葉書、関東大震災や桜島噴火などの災害・事件絵葉書、美人や力士などを題材としたブロマイド絵葉書、日本酒や粉ミルクなど様々な商品をＰＲする広告絵葉書、そして各地の観光名所など紹介する名所絵葉書などが発行された。

名所絵葉書の題材は、多くの人が集まる観光地や都市が中心となる。福岡県内では、前者の代表格として太宰府天満宮を中心とする太宰府、後者の代表格として、九州の玄関口であった門司、九州随一の都市である福岡・博多、多くの労働者が集った八幡や大牟田などが挙げられよう。これらの名所絵葉書は、個人用カメラが普及していなかった当時、自らが見た風景を物質化して人に伝えること、また思い出の風景を可視化して蒐集することを可能とし、単なる土産物を超えた存在であった。また絵葉書の発行元も、店頭でたくさんの絵葉書の中から消費者に選択してもらう必要があり、分かりやすく、興味・関心を惹く風景を撮影していた。

このように、絵葉書によって物質化・商品化された風景は、決して無作為なものではなく、撮影者（発行者）・購入者の意図が存在する。これを読み取ることは地域史を紐解くうえで重要な作業といえよう。

２）絵葉書の中の史跡

各地の名所絵葉書を見ると、多くの史跡が含まれることに気づく。福岡県内であれば、本稿で取り上げる水城跡のほかに、大宰府跡（太宰府市）、大野城跡（宇美町・太宰府市・大野城市）、元寇防塁・福岡城（福岡市）、高良山神籠石・篠山城（久留米市）、月岡古墳・日岡古墳（うきは市）などが代表例である。これらの絵葉書は、基本的に周辺の名所・観光地の絵葉書とセットで販売されており、地域の名所という枠組みの中で認識されていたと理解できよう。

４．水城跡を題材とした絵葉書

水城跡を題材とした絵葉書は、明治時代後期から昭和時代前期にかけて比較的多く発行されている。筆者は 18 種類把握・所有（表 1）しており、うち 16 種類が水域跡の現地を撮影した資料となる。当時発行された絵葉書の全てを網羅することは困難であるが、16 種類という数は、撮影場所や年代等の傾向を把握するうえで有効なデータ数といえよう。

なお、これらとは別に、水城跡の西端に存在

番号	タイトル	撮影場所	宛名面様式	年代	絵葉書セット名称	発行元	備　考
1	元寇古跡 水城	Ａ１類	B様式	２期（明治41～大正７年）			明治41年6月の消印
2	筑前水城跡	Ａ１類	B様式	２期（明治41～大正７年）		筑紫堂	明治42年6月の消印
3	筑前水城址　水城關門礎石	Ａ１類	B様式	２期（明治41～大正７年）			
4	筑前水城趾（縣道ニ沿フタル大堤）	Ａ１類	A様式	３期（大正７～昭和７年）			大正12年5月、「14 8.4」のスタンプ
5	（筑前）水城址及水門礎石實景	Ａ１類	C様式	３期（大正７～昭和７年）	太宰府天満宮宝物絵葉書		
6	筑前水城址（縣道ニ沿レタル大堤）	Ａ１類	A様式	３期？（大正７～昭和７年）			7と同じ写真
7	筑前水城址	Ａ１類	C様式	３期（大正７～昭和７年）			6と同じ写真
8	筑前水城址	Ａ１類	C様式	３期（大正７～昭和７年）	太宰府名勝絵葉書		大正10年５月のスタンプ
9	筑前水城址	Ａ１類	C様式	３期（大正７～昭和７年）	筑前都府楼絵葉書	都府楼草庵	
10	（筑前）水城跡	Ａ２類	B様式	２期（明治41～大正７年）		筑紫堂	
11	元寇の昔を物語る史蹟 水城大堤の趾	Ｂ１類	D様式	４期（昭和７～21年）		大崎周水堂	12と同じ写真
12	水城大堤の趾	Ｂ１類	D様式	４期（昭和７～21年）	官幣中社太宰府の大観	大崎周水堂	11と同じ写真
13	（博多及其付近）懐古の情趣を唆る水城の跡	Ｂ２類	C様式	３期（大正７～昭和７年）	博多及び其の付近	大崎周水堂	昭和５～７年か
14	筑前水城址　水城跡横断面 水城關門礎石（平面図）	Ｂ１・Ｃ類	C様式	３期（大正７～昭和７年）	筑前都府楼絵葉書	都府楼草庵	
15	水城址	Ｄ１類	C様式	３期（大正７～昭和７年）	福岡県絵葉書（其二）	大崎周水堂	
16	翠色満々清涼滾々たる自然の美景 水城の趣致	Ｄ２類	C様式	３期（大正７～昭和７年）	観光の筑紫路	本岡書店	
17	元軍太宰府ニ迫ル少貳景資賊将 劉副亨ヲ射落スルノ図	（想像図）	C様式	３期（大正７～昭和７年）			大正10年8月の消印
18	筑前水城關門鬼瓦（重量九貫目） 幷使用楠板	遺物写真	B様式	２期（明治41～大正７年）			

表１　水城跡を題材とした絵葉書

した庭園「思水園」（大野城市教育委員会 2019）など、間接的に水城跡に関わる絵葉書も存在するが、今回は検討の対象としない。

5．絵葉書の撮影場所

水城跡を題材とした絵葉書は、撮影場所によって、いくつかの分類が可能である（図１）。撮影場所ごとの特徴について触れておきたい。

Ａ１類：東門跡周辺（北から）…絵葉書１～９は東門跡周辺を北方向から撮影した資料である。量的に主体を占めることから、代表的な撮影場所といえ、特に県道（大正９年に国道認定）を中心に据えた構図（絵葉書２・４～８）が目立つ。

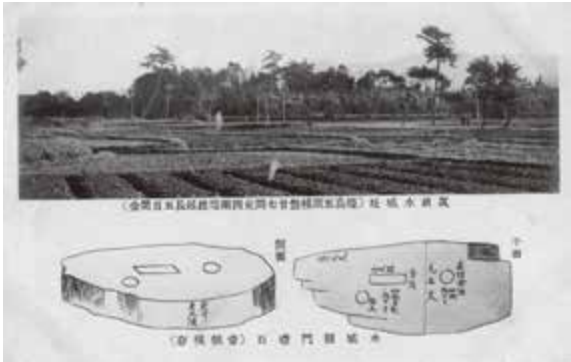
県道は、江戸時代の日田街道を踏襲し、その系譜は古代の官道まで遡る。古くから福岡平野と大宰府・筑紫平野を結ぶ大動脈であり、江戸時代には太宰府天満宮へ参詣する「さいふ詣り」のルートとしても賑わった。特に東門があった当該地は、太宰府の玄関口といえ、眼前に広がる水城跡の土塁は、訪れる人々に大きなインパクトを残したことであろう。Ａ１類は、博多方面から県道を通り、水城跡を訪れた旅人の視点に立った景観と理解することもできる。

なお県道に関連して目を引くのは松並木である。松は県道の西路肩に多く見られるが、絵葉書２には、東路肩にも確認できる。この松並木の景観については、江戸時代後期の絵図である

写真１　現在の東門跡周辺（北東から）

絵葉書１　（Ａ１類、２期（明治 40 ～大正７年））

絵葉書２　（Ａ１類、２期（明治 40 ～大正７年））



絵葉書３　（Ａ１類、２期（明治 40 ～大正７年））

絵葉書４　（Ａ１類、３期（大正７～昭和７年））

絵葉書５　（Ａ１類、３期（大正７～昭和７年））

絵葉書６　（Ａ１類、３期？（大正７～昭和７年））

絵葉書７　（Ａ１類、３期（大正７～昭和７年））

絵葉書８　（Ａ１類、３期（大正７～昭和７年））

絵葉書９　（Ａ１類、３期（大正７～昭和７年））

写真２　現在の東門跡周辺（南から）

絵葉書 10　（Ａ２類、２期（明治 40 ～大正７年））

『筑前名勝画譜』や『筑前名所図会』にも描かれており、長い間、水城跡と一体化した要素、「水城らしい」風景として認識されていた可能性が高い。

また東門跡に関連して、現存する門礎石の写真・図が掲載される場合も多い（絵葉書３～５・14）。当該の門礎石については、江戸時代に「鬼の硯石」（『筑前名所図会』）とも呼ばれ、日田街道を通行する人々の関心を集めていた。また大正 11 年には礎石の傍らに「史蹟 水城趾」の標柱が建てられるなど、近代においてもシンボル的な存在であったことが窺える。なお、門礎石の図の出典は、明治 24 年に出版された『靖方遡源』（山田安栄編纂『伏敵編』付録）であり、同書が水城跡の基本文献であったことが理解できる。

Ａ２類：東門跡周辺（南から）…絵葉書 10 は県道を中心に据え、Ａ１類の反対側（南側）から撮影した資料である。県道沿いの松並木が水城跡の南側にも続いており、江戸時代後期に描かれた『筑前名勝画譜』と変わらない景観が広がっていたことが伝わる。Ａ１類と比べ、より松並木を中心に置いた景観のように見える。なお県道の高低差を見ると、現在よりも門跡周辺が高くなっているように感じる。

Ｂ１類：土塁…絵葉書 11・12・14（上）は土塁

写真３　現在の土塁（西から）

絵葉書 11　（Ｂ１類、３期（昭和７～ 21 年））

絵葉書 12　（Ｂ１類、３期（昭和７～ 21 年））

写真４ 現在の御笠川と水城跡（東から）

絵葉書 13　（Ｂ２類、２期（大正７～昭和７年））

のみを撮影した資料であり、平野を遮断する城壁の迫力を伝えている。絵葉書 11・12 は、東土塁を西側から撮影したものであろうか。土塁の姿は、『筑紫道記』にある「横たわれる山の如し」の風景、そして現在の様子とも共通性が高い。その一方、土塁上の植生・樹木の様子は現在と大きく異なっており、下成土塁は畑地として利用され、上成土塁も草地が目立つ。地域住民により里山として管理されていた状況がうかがえる。

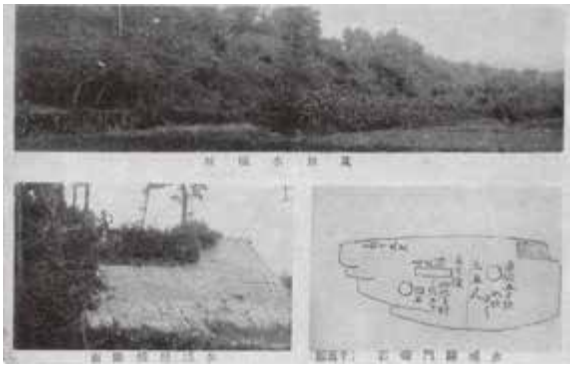
Ｂ２類：土塁と御笠川…絵葉書 13 は御笠川越しに土塁を望む資料である。御笠川河床は現在より高く、水田に水を引くための井堰も見える。考古学的にも課題となっている水城跡外濠と御笠川の関連を窺い知る上でも興味深い資料といえよう。

Ｃ類：土塁切り通し…絵葉書 14（左下）の撮影場所は、現在のＪＲ水城駅近く、「土塁断面ひろば」として整備されている場所にあたると考えられよう。整備事業に伴う発掘調査は、平成 28・29 年に九州歴史資料館により実施されたが、上部に傾斜版築が見られる点、下部にクロボク土が見られる点など、土層の堆積状況は絵葉書と共通している。

当該地周辺では土塁の開削記録が数度あるが、絵葉書の年代等を考慮すると、線路東側の道路造成に伴う開削時（大正時代末頃）の写真である可能性が高い（註１）。土塁の断面が観察できる貴重な写真であり、その希少性から絵葉書の題材として採用されたのであろう。

Ｄ類：全景…絵葉書 15・16 は水城跡の全景を撮影としたものであり、土塁の長大さと周辺景観を感じることができる。絵葉書 15 は北東側の四王寺山山麓部から撮影し、遠く脊振の山並みを望む（Ｄ１類）。絵葉書 16 は南西側の丘陵

写真５　発掘調査中の土塁断面（南西から）
（画像提供：九州歴史資料館）



絵葉書 14　（Ｂ１・Ｃ類、２期（大正７～昭和７年））

絵葉書 14 左下写真（Ｃ期）の拡大

写真６　現在の水城跡全景（北東から）

絵葉書 15　（Ｄ１類、３期（大正７～昭和７年））

絵葉書 16　（Ｄ２類、３期（大正７～昭和７年））

絵葉書 17　（３期（大正７～昭和７年））

絵葉書 18　（２期（明治 40 ～大正７年））

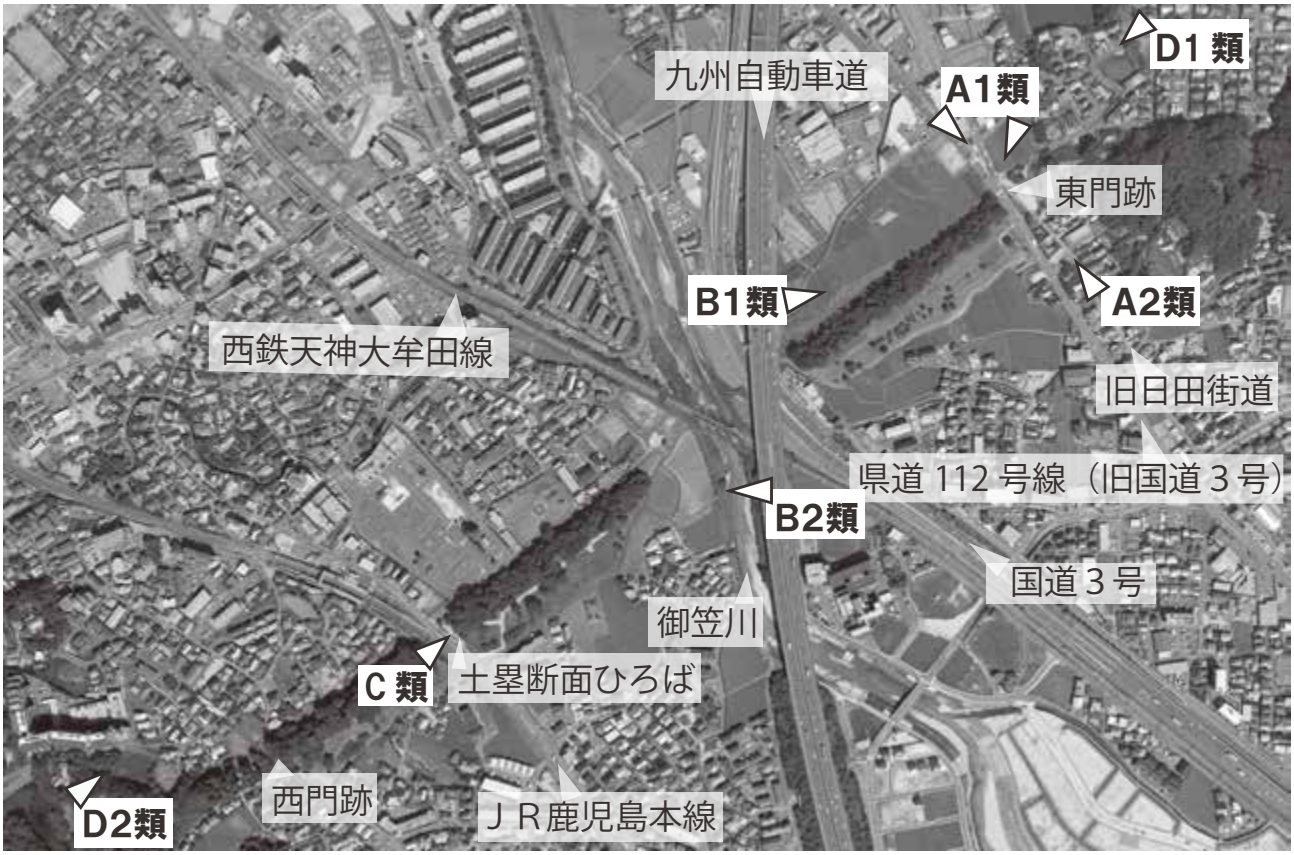


図１　現在の水城跡と絵葉書撮影場所（国土地理院撮影の空中写真を加工）

部から撮影し、四王寺山（大野城跡）と水城跡の連続性が明瞭に伝わる（Ｄ２類）。特にＤ２類の撮影方向は珍しく、昭和初期に庭園として賑わった「思水園」から撮影したものと推測できる。

このように撮影場所を概観すると、東門跡周辺（Ａ類）が重要な撮影ポイントであり、土塁とともに県道（旧日田街道）および松並木が、水城跡を象徴する景観であったことが理解できよう。またこの景観は、福岡方面から県道を通って水城を訪れた旅人の視点と合致することも偶然ではあるまい。

東門跡周辺以外の絵葉書については、土塁の迫力を強調したもの（Ｂ類）、通常見ることができない土塁断面を写したもの（Ｃ類）、土塁の長大さと周辺の景観を示したもの（Ｄ類）があり、異なった視点から水城跡の魅力を伝えようとする工夫も感じられる。

6．絵葉書の年代

絵葉書には、原則的に発行年月日などを記す書誌情報がない。歴史資料として利用するためには、年代的な位置づけの検討が不可欠である。年代の推定方法はいくつか知られており、①撮影された事物の変化による年代推定（撮影年代）、②宛名面の様式変化に基づく年代推定（発行年代）、③記念スタンプに基づく年代推定（販売年代）、④消印に基づく年代推定（使用年代）などが代表例であろう。それぞれの年代推定法には、利点と欠点があるが、②宛名面の様式変化に基づく年代推定については、最も汎用性が高く、有効な手法として知られている。

ここでは、宛名面の様式変化に基づく時期区分を行ったうえで、撮影場所の変化について検討したい。

１）宛名面の様式変化

宛名面の様式については、最上部の記載が「きかは便郵」→「きがは便郵」→「郵便はがき」に変化し、宛名範囲と通信文範囲の区分線が「なし」→「あり（下方３分の１の位置）」→「あり（2分の１の位置）」に変化することが知られている。

	最上段の表記	区分線
Ⅰ様式	きかは便郵	なし
Ⅱ様式	きかは便郵	下方（3分の1）
Ⅲ様式	きかは便郵	中央（2分の1）
Ⅳ様式	きがは便郵	中央（2分の1）
Ⅴ様式	郵便はがき	中央（2分の1）

図２　宛名面の様式変化

ここではⅠ～Ⅴ様式として、設定・呼称しておきたい。

Ⅰ様式：宛名と通信文の区分線が存在しない様式である。私製葉書が認可された明治33（1900）年から郵便規則が改正される明治40（1907）年まで宛名面に通信文を書くことが禁止されていた。このため、Ⅰ様式の年代は明治33～40年に発行されたものが主体となる。その一方、Ⅰ様式は後の時代にも少量ながら発行されており、絵葉書４・６はⅠ様式であるものの写真の様子やスタンプの年代から大正時代に撮影・発行されたと判断できる（註２）。

Ⅱ様式：宛名と通信文の区分線が、下方３分の１に設けられた様式である。宛名面における通信文の記載は、郵便規則が改正により明治40（1907）年４月１日から認められ、その範囲は宛名面の３分の１であった。その後、通信文の範囲は大正７（1918）年に変更されているため、Ⅱ様式の年代は明治40～大正７年に発行されたものと判断できる。

Ⅲ様式：宛名と通信文の区分線が、中央２分の１に設けられ、かつ最上部の表記が、「きかは便郵」と記載された様式である。宛名面における通信文の記載範囲は、郵便規則の改正により大正７（1918）年４月１日から２分の１に拡大され、現在まで引き継がれている。また、昭和８（1933）年に最上部の表記が「きかは便郵」から「きがは便郵」に変更されたため、Ⅲ様式の年代は大正７年～昭和８年に位置付けられる。

Ⅳ様式：最上部の表記が「きがは便郵」となる様式である。先述のとおり、昭和８（1933）年２月の逓信省令改正に基づき、最上部の表記が

「きかは便郵」から「きがは便郵」に変更され、その後、昭和21年に左書き表記(「郵便はがき」)に変更されるまで発行された。このため、Ⅳ様式の年代は昭和８年～ 21 年と判断できる。

Ⅴ様式：最上部の表記が、左書きの「郵便はがき」となる様式である。戦後、左書き表記が急激に普及する中、昭和 21 年に改定され、現在まで引き継がれている。詳細にみると、郵便番号記載欄の有無や桁数で変遷を追うことができるが、本稿では細分しない。

２）年代ごとの傾向

水城跡の絵葉書について、先に分類した宛名面の様式年代に基づきながら、撮影場所の変遷傾向を見てみたい。

１期（Ⅰ様式期）（明治 33 ～ 40 年）：現時点で把握できている資料はない。将来的に確認できる可能性はあるが、その数は多くないであろう。

２期（Ⅱ様式期）（明治 40 ～大正７年）：絵葉書１～３・10 が当該期の資料となり、撮影対象はＡ１類３点、Ａ２類１点となり、いずれも東門周辺の景観が写されている。

３期（Ⅲ様式期）（大正７～昭和７年）：絵葉書４～９・13 ～ 17 が当該期の資料となる。最も数が多いが、当該期は名所絵葉書の盛行期にあたるため、絵葉書の発行数自体が増えたことが要因と考えられる。撮影場所はＡ類が中心（４点）であるが、Ｂ類（土塁のみを撮影したもの）、Ｃ類(土塁切り通し部を撮影したもの)、Ｄ類(全景を撮影したもの）も確認できる。絵葉書ブームに連動した販売競争の激化に伴い、撮影対象の工夫・差別化が図られたと想定することができよう。

４期（Ⅳ様式期）（昭和７～昭和 21 年）：絵葉書 11・12 が当該期の資料となり、その数は急減していることがわかる。当該期は名所絵葉書全体の発行数も減少しているようであり、昭和６年の満州事変、昭和８年の国際連盟脱退、昭和 12 年の日中戦争開戦、そして昭和 16 年の太平洋戦争開戦へと続く社会情勢の変化が、その背景と考えられよう。

絵葉書 11・12 は同じ写真を使用しており、その撮影場所はＢ類である。２点のみの資料であるが、Ａ類（東門跡）が撮影対象でないことは興味深い。

現在、東門跡周辺については、県道 112 号線（旧国道３号）が通っているが、大野村、二日市町間の工事は昭和６～７年に実施された（赤司 2004)。この工事は、既存の旧日田街道（幅員４～５m、大正７年に国道認定）に並行するように、幅員 11 mの直線化した道路を敷設するものであり、松並木の伐採を含めて、東門周辺の景観は劇的に変化したはずである。工事後の景観は、水城跡を代表する魅力的な景観と認識されず、絵葉書の題材として採用されなかった可能性があろう。

また区分上は３期（大正７～昭和７年）にあたる絵葉書 13 も興味深い。当該資料は、博多周辺の名所などを写した 30 枚組の中の１枚であるが、30 枚の中には、昭和５年に建築された九州帝国大学工学部や同年再建された宮地嶽神社が含まれており、昭和５～７年に撮影されたと考えられる。つまり、撮影時には国道敷設工事が開始されていた可能性があり、敢えて東門跡周辺の景観を選択しなかったと想定することもできよう。

５期（Ⅴ様式期）（昭和 21 年～）：現時点で筆者が把握している資料はなく、本稿では分析を行うことができない。

７．太宰府名所としての水城跡

１）絵葉書の組み合わせについて

絵葉書は、撮影対象が異なる複数枚（５枚、８枚、10 枚など）がセットとなり、袋入りで販売されることが一般的であった。名所絵葉書を例にとれば、１つの観光地や都市をテーマとした袋の中に、個別の建物や風景を撮影した複数枚の絵葉書が収められている。

このため、セットの構成を分析できれば、当時の観光地としての広がりやまとまり、地点ごとの注目度などを類推することができる。

ここでは、筆者が保有している資料のみ（表２）

番号	タイトル	時期区分	太宰府													福岡市						その他地域			発行元
			水城跡	都府楼跡	都府楼跡出土遺物	大野城跡	榎寺	苅萱の関	太宰府天満宮	天拝山	国分寺	観世音寺	戒壇院	武蔵温泉	その他	元寇防塁	筥崎宮	香椎宮	九州帝国大学	帆柱石	その他	筑後地域	糟屋・宗像地域	その他地域	
1	筑前都府楼絵葉書	３期	1	3	2	1	1	1																	都府楼草庵
2	筑前都府楼絵葉書	３期	1	6		2	1	1																	都府楼草庵
3	筑前都府楼絵葉書	３期	1	2	1	1	1	1							1										都府楼草庵
4	官幣中社大宰府の大観	４期	1	1		1	1		11	1	1	2	1		5										大崎周水堂
5	大宰府名勝絵葉書	３期	1	1			1		4	1		1													
6	観光の筑紫路	３期	1	1			1		1		1	1		1											本間書店
7	絵葉書（其二）福岡県	３期	1	1					1			1				1	1	1	1	1	1	1		1	大崎周水堂
8	博多及び其の付近	３期	1	1					1		1	1	1		1	1	1	1	2	1	12		4	1	大崎周水堂

表２　水城跡が含まれる絵葉書の組み合わせ

を分析対象としたが、資料数に限りがあるうえ、現在骨董品として流通している絵葉書の多くは、そのセットが全て揃っているわけではない。あくまで傾向として把握することを目的としたい。

表２を見ると、水城跡が含まれる絵葉書の組み合わせは、大きく３グループに分けられることがわかる。

グループ１：都府楼跡など太宰府の史跡を取り上げたものであり、№１～３が該当する。「筑前都府楼絵葉書」（註３）は都府楼跡近くで営業していた都府楼草庵(のちに古瓦参考館に改称)が発行した絵葉書セットであり、都府楼跡を中心に史跡に特化した特徴的な構成といえる。

グループ２：太宰府天満宮を中心とし、都府楼跡や観世音寺、戒壇院、榎寺など近隣の名所で構成されており、№４～６が該当する。水城跡が太宰府名所の一つとして位置づけられていることがわかる。

グループ３：福岡市内および周辺地域の名所旧跡で構成されており、№７・８が該当する。太宰府天満宮、都府楼跡、水城跡などの太宰府名所を含めて、福岡市近郊の名所旧跡として認識されていたことがわかる。

グループ３については、広域な構成となっているが、全体を通して見れば、水城跡が太宰府名所の一角として位置づけられていたことが理解できよう。

２）さいふ詣りと水城跡

水城跡はいつからどのようなきっかけで太宰府名所として認識されるようになったのであろうか。その契機は、江戸時代からブームを迎えた「さいふ詣り」に求められよう。さいふ詣りとは、太宰府天満宮とその周辺の名所旧跡を巡る信仰活動、旅行・行楽であり、「講」を組織しその代表者が訪れることも多かったという。

鉄道敷設以前、博多方面から太宰府に向かうには水城東門跡を通過する必要があり、多くの旅人がさいふ詣りの道すがら足を止め、その雄大な姿を眺めたことは想像に難くない。江戸時代の紀行文の中にも水城跡は登場する（加藤 1993）。

また明治時代では、さいふ詣りのガイドブック・土産物的な存在であった太宰府天満宮の境内絵図（九州歴史資料館 2020）との関連が興味深い。境内絵図の構図は、その名のとおり天満宮境内を描いたものであるが、併せて周辺の名所を描いた資料も散見される。周辺の名所として水城跡が頻繁に登場するのは明治 30 年代であり、「筑前国太宰府神社之全景及十二景」（1902 年）（図3）や「太宰府名区一覧」（1901 年）には、都府楼跡、観世音寺、榎社などとともに紹介されている。この組み合わせについては、前節で示した絵葉書のセット関係と同様であり、用途の近縁性がうかがえる。土産物の主流が絵葉書に移るのに伴い、境内絵図が姿を消していったという指摘（日

図３　境内絵図（「筑前国大宰府神社之全景及び十二景」）
※下段右端が水城跡

図４　図３の部分拡大

野 2020）とも調和的といえよう。なお「筑前国太宰府神社之全景及十二景」や「太宰府名区一覧」で描かれた水城跡の構図は、東門を北東方向から眺めるものであり、絵葉書の構図と類似している。この点からも、初期の絵葉書が境内絵図の役割を踏襲していることが想起できよう。

８．　元寇遺跡としての水城跡

１）水城跡の認識変化

先述のとおり、水城跡は西暦 664 年に築造されたものであるが、鎌倉時代の元寇（文永の役）の際に戦場となったという見解がある。この見解は鎌倉時代中～後期に著された『八幡愚童訓』に基づくもので、同書には元軍に押された日本軍が太宰府まで退却し水城を防衛ラインとしたことが記されている。

元寇と水城跡を結びつける史料は極めて少なく、他史料との比較などから判断する限り、史実である可能性は低い（註４）。また江戸時代の地誌にも、『八幡愚童訓』を積極的に引用する機運は見られないが（註５）、明治時代になると元寇遺跡としてのイメージが急激に強まるようである。

絵葉書のタイトルを見ても「元寇古跡 水城跡」（絵葉書１）、「元寇の昔を物語る史蹟 水城大堤の趾」（絵葉書 11）が確認できる。また絵葉書２には、絵葉書差出人が「溝ヲ穿チ長堤ヲ築キ元軍ヲ防カントセルモノ」と書き足しており、絵葉書の発行者だけでなく、絵葉書購入者も元寇遺跡として認識していたことがうかがえる。

こうした認識は、どの程度浸透していたのであろうか。表３は、明治・大正時代における観光冊子の中での水城跡に関する記述である。これを見てわかるとおり、いずれも天智天皇の時代に造られたという史実とともに、元寇の際に活躍したことが併記されており、元寇遺跡としての認識が浸透していたことがわかる。

一方で、こうした風潮に警鐘を鳴らした研究者もいた。武谷水城は『元寇史實の梗概』の中で、元寇と水城は無関係であるにも関わらず、『八幡愚童訓』などの誤りをそのまま記載する刊行物が多いことを厳しく指摘している（武谷 1931）。つまり武谷がわざわざこのようにして記述せざるを得なかった背景には、「水城＝元寇遺跡」という強い認識が、「水城＝古代の防塁遺跡」という

書名	刊行年	著者	内容（抜粋）
九州鉄道旅客便覧	1893（明治26）年	六花庵	日本記天智三年筑紫に於て大堤を築きて水城と号く、（中略）蒙古の兵も上陸ここまで攻め来たりと古書に見ゆ。
太宰府めぐり	1902（明治35）年	伊東尾四郎	日本記に天智天皇三年「筑紫に於て大堤を築きて、水を貯へ名つけて水城という」とあり、（中略）文永弘安の役、我軍水城に退きしこと、又敵の捕囚を斬りしことなど、八幡愚童訓に見ゆ
太宰府名所誌	1902（明治35）年	松尾光淑	日本記に天智天皇三年、筑紫に大堤を築きて、水を貯ふ名付けて水城と云ふと記せり、（中略）元寇の役、賊軍博多を破りて、直ちに太宰府を犯さんとす。我兵水城を死守し、縦横奮戦大いにこれを破りしかば、敵軍上陸する能はず、偶々瓢風大いに起こり、海水簸蕩し、賊艦悉く覆没しぬ。
福岡県旅行案内	1902（明治35）年	森岡榮	日本記に天智天皇三年筑紫に大堤を築き水を貯ふ名けて水城という云ふもの則ち是なり、（中略）彼の元寇の役敵兵を苦しめたる所も此の所なり。
九鉄と沿線	1925（大正14）年	九州鉄道株式会社	日本紀に「天智天皇三年於筑紫築大堤貯水名二曰水城」とあるのはこれである。（中略）弘安の役に元寇の使者俘兵120人を斬殺したのもこの土地であると伝えられている。
太宰府の光	1926（大正15）年	大久保千濤	続日本記に天智天皇三年の條に「此歳筑紫に大堤を築き、水を貯へ水城と云ふ」を初見とする。（中略）又八幡本紀に「文永十一年蒙古襲来の時、我将士水城の要害を固めて防御す云々。

表３　太宰府周辺の観光冊子における水城跡の記述

史実以上に受け入れられていた現実があったと考えられよう（岡寺・下高 2009）。

２）元寇記念碑建設運動

明治時代、水城跡が元寇遺跡として認識されるようになった契機はいかなるものであろうか。この背景には明治 21 年から始まった元寇記念碑建設運動があることは間違いない（岡寺・下高 2009）。元寇記念碑建設運動とは、元福岡警察署長の湯池丈雄が提唱した護国運動であり、蒙古襲来の歴史回顧を通じて、亀山上皇銅像を建設することを目的に、全国的な義援金活動などを展開した。湯地は、蒙古襲来に関する幻灯映画（註６）やパノラマ画を携え講演会や展覧会、音楽会などを催し、啓蒙用書籍として『元寇反撃 護国美談』（湯地 1891）、パンフレットとして『孫みやげ―日本無双記念碑咄し』、また学術書として国防史を編纂した『伏敵編』（山田 1891）を刊行するなど、積極的にＰＲを進めた。一連の運動は、清国やロシアと対立する国際情勢と元寇を重ね合わせることで、大きなうねりとなり、明治 34 年には講演会の累計参加者は 100 万人に及んだという。この運動の中で、水城跡は『八幡愚童訓』に基づいた位置づけで紹介されており、「水城＝元寇遺跡」としての認識に繋がったと考えられる。

また明治 22 年２月には、水城跡の現地に元寇記念碑事務所によって「憂国ノ士ハ少時車ヲ止メヨ」と記された木柱と標示板が設置された。通りがかる人々は、元寇遺跡としての認識を強めたことであろう（註７）。

さらに明治時代～大正時代の軍歌・学校唱歌集には、「水城」という歌も確認できる（註８）。作詞は小田深蔵によるもので、歌詞を見る限り、明らかに元寇をイメージした内容であり、元寇防塁と混同している感もある。元寇記念碑建設運動との直接的な関わりは不明であるが、時期的にも内容的にも運動の影響下で作成されたものであろう

し、元寇遺跡としてのイメージ強化に繋がったことは確かであろう。

また絵葉書 17 も興味深い。「元軍太宰府ニ迫ル少貳景資賊将劉副亨ヲ射落スノ図」とあり、水城が戦場になった風景が描かれている（註９）。

この絵葉書は、元寇の各場面を絵画化した 11 枚組のうちの１枚である。原画の所在は不明であるが、作者は明治中期～後期に多くの元寇画を作成した矢田一嘯である可能性が高い（福岡県立美術館 2005）。原画は、元寇記念碑建設運動の一環として作成され、展覧会や講演会で使用されたものであろう。こうした元寇画は、多くの一般市民に元寇の様子を可視化させ、印象付ける役割を果たしたと考えられる。

これまで述べたとおり、「水城＝元寇遺跡」という認識は、明治 21 年に開始された元寇記念碑建設運動によって広まった。運動は明治 37 年の亀山上皇銅像の建設によって結実するが、固定化した「元寇観」とこれに伴う「水城観」は、神風信仰も相まって、大正～昭和時代前期、さらにその命脈は現在まで引き継がれているといえよう。

9. まとめ

本稿では、水城跡を題材とした絵葉書を通して、当時の人々が水城跡をどのように見つめていたのか検討を行った。

主な成果を改めて示しておきたい。

①絵葉書の撮影場所は東門周辺が主体である。土塁と共に、旧日田街道および松並木が一体化した姿こそ、「水城跡らしい」風景として認識されていた可能性が高い。

②国道の敷設工事（昭和６～７年）以降、東門周辺を題材とした絵葉書は確認できない。道路新設および松並木の消滅が、景観的な魅力に影響を与えた可能性がある。

③セット販売される絵葉書の組み合わせを見ると、太宰府天満宮、都府楼跡、観世音寺などとの組み合わせが多く、太宰府名所の一角として位置づけられていたことがわかる。

④絵葉書の組み合わせから、「さいふ詣り」との関連性が想起される。年代的にも構図的にも、さいふ詣りのガイドブック的・土産物的な存在であった太宰府天満宮境内絵図から、絵葉書に移行したと理解できる。

⑤水城跡は元寇遺跡としても注目されていた。この背景として、湯地丈雄が提唱した「元寇記念碑建設運動」による元寇認識の浸透が想定される。

10. おわりに

水城跡は、西暦 664 年に築造された防衛施設である。しかしながら、城壁として認識された期間は、1350 年を越える歴史の中では決して長くない。それぞれの時代、人々は様々な角度から水城跡と関わり、眺め、そして守り伝えてきた。絵葉書の中に写る、さいふ詣りの名所としての水城跡も、元寇遺跡としての水城跡も、重層的な魅力の一コマといえよう。

謝辞

本稿作成にあたっては、大野城心のふるさと館職員のほか、杉原敏之氏、小鹿野亮氏、井上信正氏、髙橋学氏、九州歴史資料館にご協力をいただきました。感謝申し上げます。

【註】

註１　「古老聞書」（福地 1975）に掲載された聞き取りによれば、大正時代の終りに近い頃、水城駅の東側を県道が開くため、村人が土塁を掘削したという。

註２　絵葉書４・６ともに、大正４年に建設された「水城大堤之碑」が写っており、これ以降に撮影されたことがわかる。また絵葉書４の宛名面に大正 12 年５月のスタンプ、写真面に「148.4」のスタンプが見られ、大正時代後期に発行された可能性が高い。

註３　筆者が所有している「筑前都府楼絵葉書」は４セット（うち水城跡を含むもの３セット）ある。袋のデザイン、収納された絵葉書の内容・組み合わせが少しずつ異なっているため、表２

の中では３種類として表示している。

註４　中山平次郎（中山 1915）や武谷水城（武谷 1931）はいち早く問題点を指摘している。近年では服部英雄が『八幡愚童訓』の記述を明確に否定する一方で、『鎌倉年代記裏書』などの記述から、10 月 24 日に太宰府で合戦があったとし、「水城をめぐる攻防を含むものだっただろう」と想定している（服部 2005）。

註５　19 世紀前半に編纂された『筑前国続風土記拾遺』では、『八幡愚童訓』の内容を含めて引用しているが、これが一般的な認識であったとは考え難い。

註６　幻灯とは、ガラス板の絵に光を当て、レンズで拡大して、映写幕に映して見せる装置。「護国談元寇歴史映画」では 30 コマの光景を映写幕に写し、湯地が声を張り上げて熱演したという。ガラス板は現存しないが、口上の内容は確認でき、この中で水城に関連する内容が２枚ないし３枚存在することがわかる（太田 2009）。

註７　明治 22 年２月 19 日付の福岡日日新聞に詳細な内容が掲載されている。長文であるがそのまま記載する。

〇憂国の士は少時車を止めよ　御笠郡上水城村の路傍には「憂国の士ハ少時車を止めよ」と書したる棒杭を一昨日建設し其側に左の二項を榜示せり

一　此城ハ天智天皇ノ時堤ヲ築キ水ヲ貯フ名ケテ水城ト云フ盖シ當時太宰府ノ要害トシテ異国ノ入寇ニ備ヘタルモノナリ其後文永十一年十月蒙古ノ賊數十万壹岐對馬平戸等ヲ侵略シ勝ニ乗シ博多及ヒ村落ヲ焼テ進ム我軍利アラス退テ此地ヲ守リ遂ニ蒙賊ヲ敗ル矣若シ其詳ヲ知ラント欲セハ福岡元寇記念碑建設事務所ニ問ヘ

一　路傍ノ岡ニ登レハ當時ノ形跡一目瞭然タリ

註８　現時点で『軍歌集　忠実勇武』（明治 27 年刊行）、『日本学生新唱歌』（明治 43 年刊行）、『新撰学校唱歌集』（明治 44 年刊行）、『大正新選学校唱歌』（大正３年刊行）での掲載を確認している。歌詞は下のとおりである。

１．あまたが心を一つにして　水城を守る益良武夫　寄せ来る船は山とそびえ
降りくる火矢は雨と注ぐ　命をにへに皇国のため　寇うちはらういと勇まし

２．波風荒び雷なり　逆巻く波の音すさまし
砕くる千艦底に沈み
たうるる屍うみをうづむ　ことごと寇を
筑紫潟の　水城の名こう世々に残れ

註９　元軍の副将（左副元帥）であった劉復亨が、流れ矢にあたり負傷した場所は赤坂山周辺と考えられている。『八幡愚童訓』の中でも水城跡での戦闘に関連付けられていないが、元寇記念碑建設運動に伴う資料の中には、少弐景資が水城で劉復亨を射た旨の説明が散見される（日蓮上人銅像台座壁画銅板など）。

【参考文献】

赤司岩雄 2004「第五編 近代　第七章　交通・通信」『大野城市史　下巻』大野城市
安藤駿佑 2016「近代日本における「元寇」の想起」『政治学研究』第 56 号 慶応義塾大学法学部政治学科ゼミナール
太田弘毅 2009『元寇役の回顧　記念碑建設資料』錦正社
大野城市教育委員会 2019『まぼろしの思水園』大野城市の文化財第 50 集
岡寺良・下高大輔 2009「第Ⅷ章（５）その後の水城－後世の「水城」に対する認識－」『水城跡―下巻－』九州歴史資料館
加藤史朗 1993「第三編 第三章 第二節 さいふ詣りの道」『太宰府市史 民俗資料篇』太宰府市
川添昭二 1977『蒙古襲来研究史論』中世史選書１ 雄山閣出版
景夢如 2019「明治日本における「想起された元寇」－元寇記念碑建設運動を中心に―」『日本語・日本学研究』第９号 東京外国語大学国際日本研究センター
九州鉄道株式会社 1925『九鉄と沿線』
九州歴史資料館 2020『太宰府天満宮の境内絵図－さいふまいりの江戸・明治－』
金容澈 2021「近代日本の元寇図と〈蒙古襲来絵詞〉」『東アジアにおける知の往還』（アジア遊学

255）大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館・高麗大学校グローバル日本研究院
佐藤健二 1994「絵はがき覚書―メディアのアルケオロジー―」『風景の生産・風景の解放』講談社
佐藤健二 2007「絵葉書と観光」『観光文化学』新曜社
武谷水城 1931『元寇史実の梗概』海軍協会
田邊幹 2002「メディアとしての絵葉書」『新潟県立博物館研究紀要』第３号
中山平次郎 1915「元寇史研究の三参考分籍」『元寇史跡の新研究』史蹟現地講演会
服部英雄 2005「第三編　第二章 蒙古襲来と大野城市域」『大野城市史 上巻』大野城市
服部英雄 2014『蒙古襲来』山川出版社
服部英雄 2017『蒙古襲来と神風』中公新書 2461 中央公論新社
日野綾子 2020「太宰府天満宮の一枚刷り境内絵図」『太宰府天満宮の境内絵図－さいふまいりの江戸・明治－』九州歴史資料館
平田健 2015『日本考古学百景　戦前の絵葉書にみる遺跡と遺物』吉川弘文館
福岡県立美術館 2005『よみがえる明治絵画　修復された矢田一嘯「蒙古襲来絵図」』
福地通義 1975「古老聞書」『大野城市の文化財』第７集 大野城市教育委員会
包黎明 2010「中学校歴史教科書における「元寇」記述についての比較研究」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第 59 号
益田啓一郎 2004『ふくおか絵葉書浪漫　アンティーク絵葉書に見る明治・大正・昭和の福岡県風俗史』海鳥社
水城跡整備事業推進協議会 2015『特別史跡水城跡保存整備基本設計』
毛利康秀 2013「絵葉書のメディア論的な予備的分析」『愛国学園大学人間文化研究紀要』第 15 号
毛利康秀 2020「歴史イメージとしての絵葉書」『日本大学文理学部情報科学研究所　年次研究報告書』№.20
郵政省郵務局郵便事業史編纂室 1991『郵便創業 120 年の歴史』ぎょうせい
山田安榮 1891『靖方遡源』吉野半七
湯地丈雄編 1891『元寇反撃　護国美談』護国堂
吉田隆一編 1906『福岡県全誌　下篇』安河内喜佐吉

岡山県瀬戸内市慈眼院鐘（筑紫神社旧鐘）の検討

大重　優花

1．慈眼院鐘（筑紫神社旧鐘）

岡山県瀬戸内市長船町の真言宗宝城山西方寺慈眼院にある永徳４（1384）年銘の梵鐘は、その銘文から、元来、福岡県筑紫野市筑紫神社に奉納され、明応７（1498）年に山口県周防大島町の「屋代庄畑村」に移り、再転して岡山市仏心寺、明治20（1887）年に慈眼院の有に帰したことがわかる。

筑紫神社は、平安時代初期に朝廷より神階が授与された式内社であるが、神社に関する史・資料としては、本鐘が唯一の中世の遺品であり、貴重である［西村 1999］。

しかしながら、中世鋳物師に関する考古・民俗・文献・金工の学際研究が進む現在でもなお本鐘の研究は少なく、その位置づけも不明な点が多い。

そこで小稿では、本鐘の位置づけを行う。

（1）研究略史

本鐘は、筑前国の近世の地誌類には一切みえない。

本鐘に関する研究として、永山卯三郎氏の『岡山県金石史 続』が挙げられる。氏は銘文だけでなく、形状や原奉納地・移動先寺社の略由縁など、本鐘に関する基本的な事項について述べた［永山 1954、321-326 頁］。

本鐘の考古学的な研究として、製作地をめぐる議論がある。坪井良平氏は、①Ｘ字形接点の意匠、②駒の爪が２段、という２点から本鐘を芦屋鋳物師の作とした［坪井 1970、168 頁］。西村強三氏も、この点については首肯したが［西村 2001］、地理的関係と銘文の撰者が大宰府の横岳山崇福寺第 27 世住持の岳雲宗丘である点から、大宰府の鋳物師の製作と推定した［西村 1987］。

（2）現状と課題、方法論

これらは梵鐘の形態的検討だが、研究は進展していない。

梵鐘の考古学的な研究では、坪井氏が 1930 ～ 70 年代に作成した梵鐘実測図が今日まで利用さ

写真１・２　岡山県瀬戸内市慈眼院鐘（平成 16（2004）年瀬戸内市指定文化財）

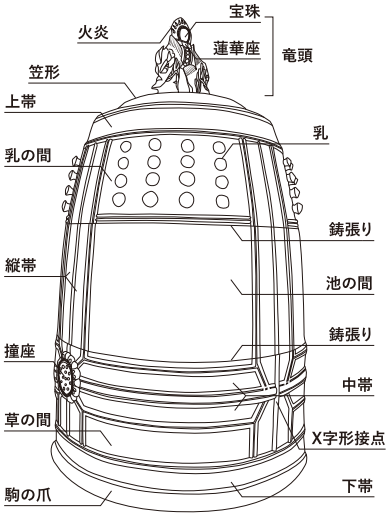


図１　梵鐘の各部名称

れている。しかし、坪井氏の実測図はスケッチに近く、実物と比較すると差異が大きい。1980 年代以降、梵鐘鋳造遺構や鋳型の発掘例が増加しており、それらと対比するには、今日の研究水準に見合う梵鐘実測図の新たな作成が必要である。そこで、小稿では梵鐘を実見調査し、高画素の写真撮影から精度の高い実測図を作成した（図 2･3）。これにより従来の様式面からの再検討だけでなく、技術面からの検討が可能になる。

このことについて、近年の五十川伸矢氏の研究に注目したい。氏は 2006 年以降、新たに梵鐘の造型（鋳型製作）と鋳造（溶湯作業）の技術痕跡に着目した。鋳型の分割数や位置、金属が流れ込む堰や揚り（空気抜き）の痕跡である湯口系にも時代的な変遷があり、鋳物師の流派の違いを反映する可能性があること、無銘の梵鐘でも技術痕跡から時期や鋳物師組織を比定できると指摘する［五十川 2016 など］。このような製作技術の痕跡は、従来の実測図には反映されておらず、実見調査の必要がある。関西地域では、五十川氏や杉山洋氏が実見調査から鋳物師の流派や組織に迫っているが、九州など多くの地域では研究が遅れている。中世の鋳物師組織の特定には、実見調査などによる、高精度で精密な実測図の作成や計測データの蓄積が今日的な研究として必要不可欠である。

（3）様式

本鐘の法量は、総高 90.1㎝、鐘身高 69.2㎝、口径 53.4㎝、口辺厚 5.7㎝で、同時代では平均的な大きさである。乳の間に 4 段 4 列の乳を配置する。上・下帯はともに素文である。乳の数や素文

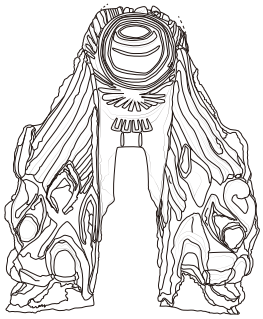


図 3　慈眼院鐘竜頭実測図

写真 3　慈眼院鐘竜頭

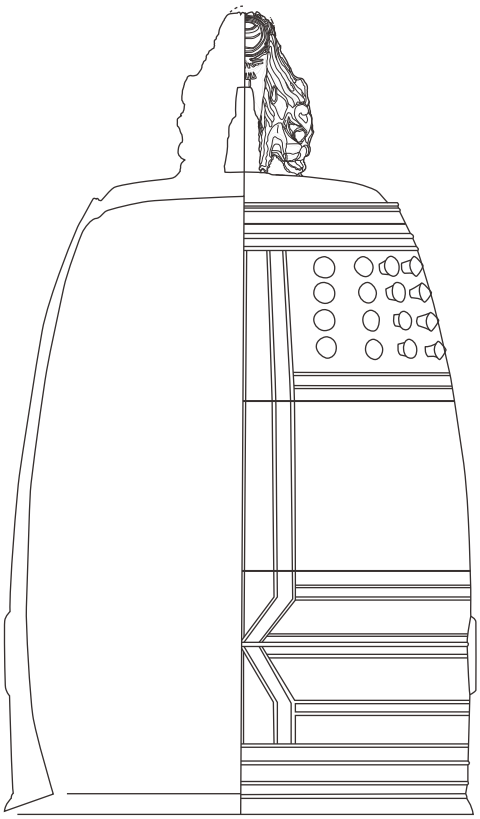


図 2　慈眼院鐘実測図
（『梵鐘実測図集成』を一部改変、S ＝ 1 ／ 10）

の上・下帯は同時代に多い特徴である（図 2）［西村 1999］。

竜頭は残存高 18.5㎝である。２つの竜頭を繋ぐ頸部の中央に蓮華座を伴う火焔宝珠を高く突き出す。上方向に伸びたたてがみと、宝珠下の蓮華座が形骸化している点は、本鐘の特徴である（図 3、写真 3）。

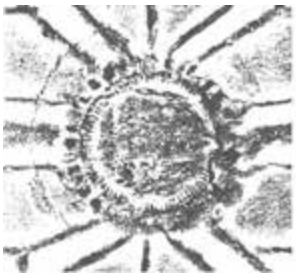


図 4　慈眼院鐘撞座拓本
（『梵鐘実測図集成』）

写真 4　慈眼院鐘撞座

乳は高さ 1.8 ～ 2cm、直径 2.5cm である。形はやや円錐状の頂部とラッパ形の頸部からなる茸状であり、この時代の標準的な特徴を示す［坪井 1970、154 頁］。

撞座は潰れているため詳細はわからないが、中

房の周囲に蕊帯、さらにその周囲に花弁を表しているようだ（図4、写真4）。西村氏は、本鐘の撞座を複弁八葉蓮華文とした［西村1999］。撞座の位置は時代が下るごとに下降する傾向にある。本鐘の鐘身高に対する撞座中心までの高さの比率は26.2％で、南北朝時代の22.3％（平均値）や、鎌倉時代の22.9％（平均値）よりも高く、平安時代後期の27.7％（平均値）に近い［坪井1970、93・122・155頁］。

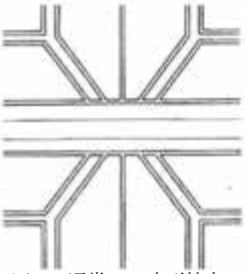


図5　通常のX字形接点（横浜市歴史博物館2000）

写真5　「清原型交差」（村上2020）

撞座のない2ヶ所の縦帯が中帯と交差する部分（X字形接点）は、一般の袈裟襷（図5）とは表現が異なる。一般の袈裟襷の中帯の中央部は、一条の太線（紐）に、それを挟んで上下に各一条の細線（紐）を添え、この三条一組の線（紐）が撞座以外は途切れることなく鐘身をめぐる。しかし、本鐘のX字形接点では、上下の細線（紐）が消

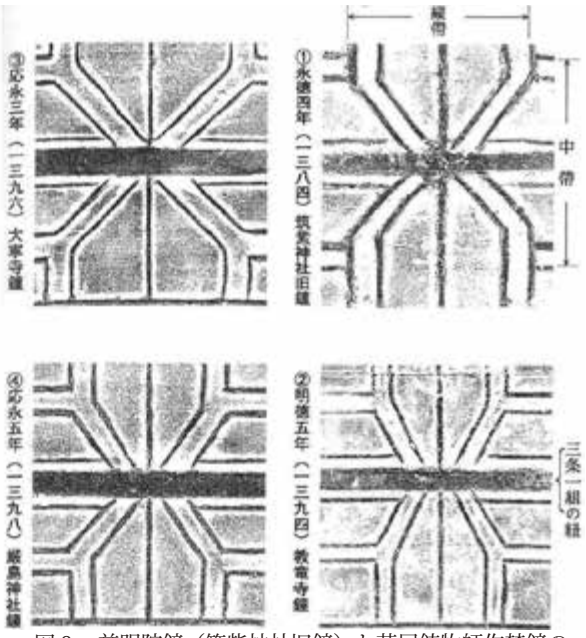


図6　慈眼院鐘（筑紫神社旧鐘）と芦屋鋳物師作梵鐘のX字形接点（西村2001）

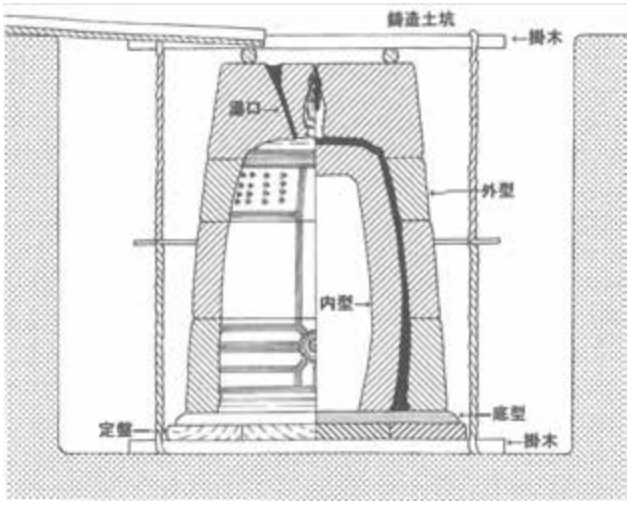


図7　梵鐘鋳造模式図（五十川2008）

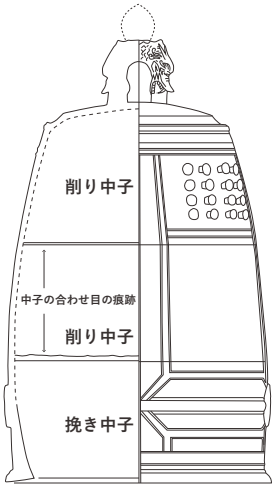


図8　大寧寺鐘内面模式図（遠藤2008を再トレース）

写真6　挽き中子成型（遠藤2008）

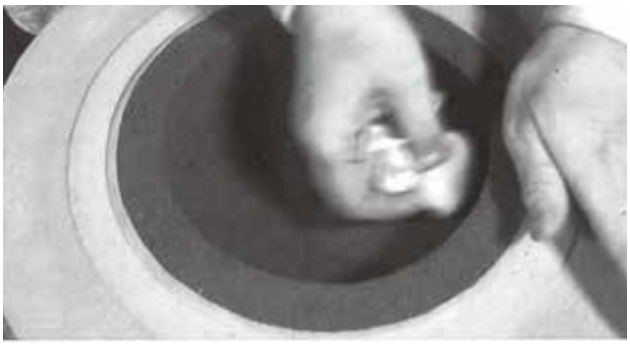


写真7　削り中子成型（遠藤2008）

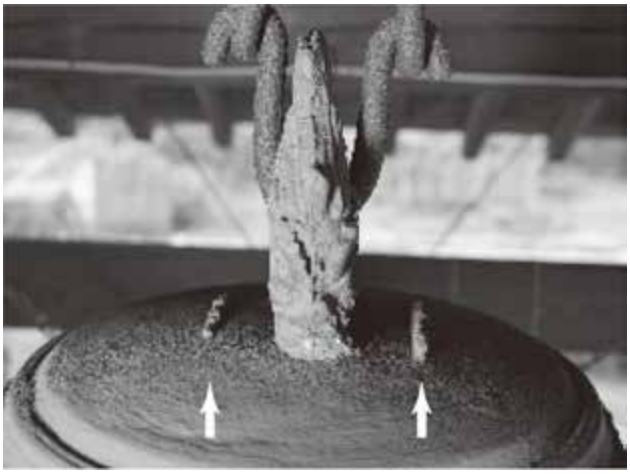


写真８　慈眼院鐘の湯口系

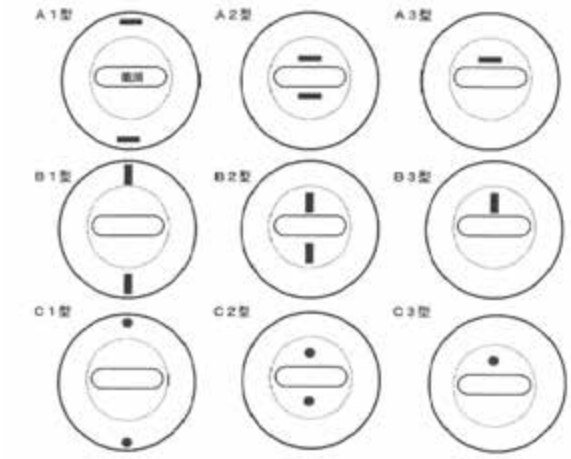


図９　梵鐘の湯口系（五十川 2006）

失する。（図 6）この独特なＸ字形接点は物部姓鋳物師に後出する清原姓鋳物師の鐘の特徴で、村上伸二氏は「清原型交差」と命名した（写真 5）［村上 2020］。

駒の爪は高さ 2.2cm、幅 1.4cm と張り出す。２段の駒の爪は、九州北部の地方色である［坪井 1970、155 頁］。

（４）製作技術

竜頭の宝珠の先端が欠損している（図 3、写真 3）。これは、後の打撃等による破損ではなく、鋳造時にガスが溜まったことによる欠陥、あるいは鋳造時の湯圧が足りなかったため、湯（溶けた金属）が火炎部分まで達しなかったためのものである［新郷 2020］。

梵鐘や鍋釜のような回転体の鋳型は、「挽型」という器物の断面形をかたどった板に回転軸を取り付け、挽型の外側に骨材を積み、その外壁に真土（砂･粘土･焼土の粉末を混合したもの）を塗って、挽型を回しながら成形する。中子とは、中空の製品を作るときに内側の空洞部分を形作るための鋳型で、鋳物は製品の表面にあたる外型と中子を合わせたときに生じる隙間に金属を流し込んで作る。中子の造型方式にはいくつもの種類があることが民俗例からも指摘されているが［吉田 2004］、芦屋鋳物師は、中子下部を「挽き中子法」、上部を「削り中子法」という別々の方法で作った中子を繋ぎ、１つの中子を作る「継ぎ中子法」を用いる（図 8）。挽き中子法は、製品の肉厚分だけ減じた中子の形状の板に回転軸を取り付けて挽いて作る（写真 6）。削り中子法は、成形された外型に砂を込めて形を写し取り、肉厚分を削り落として作る（写真 7）［遠藤 2008］。こうした特徴をふまえ本鐘の内面を観察すると、継ぎ中子法特有の帯状の突起（窪み）は確認できず、全体が波打っており、全面削り中子法だと考えられる。

外型と中子の空隙を支える型持と思われる痕跡が、笠形から上帯にかけて複数個所みられる。湯口系は、五十川氏が行った分類のＡ２型にあたる（写真 8、図 9）［五十川 2016］。

外型の単位は范線で判別でき、笠形１個、鐘身

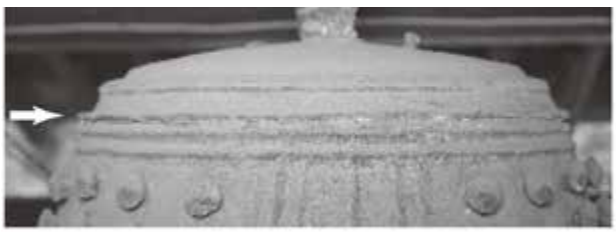


写真９　慈眼院鐘の鋳型分割位置

図 10　上帯での鋳型分割位置（五十川 2017）

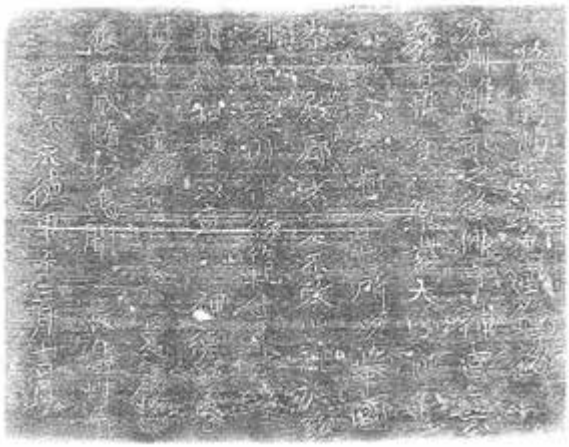


図 11　原銘（第一区）（西村 2001）

図 12　原銘（第二区）（西村 2001）

部３個の計４個に分かれる。12 世紀以降の梵鐘の鐘身最上部の鋳型分割境界の位置には、上帯上端・上帯中央・上帯下端の３種がある。本鐘の境界位置は上帯中央で、これは河内丹治姓鋳物師の梵鐘に共通する特徴的な技術である（写真９、図 10）［五十川 2016］。

本鐘には、湯口系や鋳型継ぎ目の鋳張の処理が甘い、竜頭に対して縦帯がずれる、縦帯を斜めに配置する、乳が縦横揃っていない等、全体にやや手荒な作技が目立つ。

以上のことから、本鐘は芦屋鋳物師の作ではないと断言できる。

（５）銘文

銘文は池の間四区と鐘の内面に原銘（永徳）、第一次追銘（明和）、第二次追銘（明治）の３つがあり、全て陰刻である。

a. 原銘

（第一区）（図 11）

筑前州筑紫宮鐘銘
九州離乱之後佛宇神宮二不
廃者惟有　筑紫大明神霊
威照古亦耀今也所以挙國
敬之殿廊大宗不改旧観於玆
自賢施財化縁範金為巨鐘
朝暮扣撃以宣　神徳警昏
聵也　西都岳雲宗丘為之銘曰
應願成随扣鳴聞々寂樂性情
星集永徳甲子三月吉日

（第二区）（図 12）

奉　施入　筑紫大明神（中央に１行）

原銘は、大宰府の横岳山崇福寺（おうがくさんそうふくじ）の第 27 世住持岳雲宗丘（『横嶽志』（寛文年間（1661 ～ 72）編集）「横嶽山前住籍」）の撰である。「筑前州筑紫宮鐘銘」と題し、激しい戦乱の後、なお仏宇（仏事を行うお堂）、神殿とも厳として旧観を保つさまを称える［西村 1999］。

坪井氏は、梵鐘銘文の形式を次の３種類に大別する。

第１種｜最も完備した形式で、「序」と「銘」で構成される。「序」は、鋳鐘発願の趣旨や寺院の来由、鋳造の時期などを述べ、あわせて願主・檀那・鋳工などの名を記す。「銘」は通例韻文からなり、仏法の功徳、撞鐘・鋳鐘の利益を賛嘆する。

第２種｜序・銘の区別がなく、単に紀年・寺名・願主・檀那・鋳工などの名を記すほか、発願の趣旨または梵鐘の功徳などを述べた銘辞をもつ。

第３種｜最も簡単な形式で、銘辞をもたない。

本鐘の原銘は、第１種にあたる。この種の銘文は、学者高僧でなければ撰することのできないもので、有力な檀那や庇護者により創立された寺社の鐘にしかみられない。そのため、序と銘を完備した銘文は、中世梵鐘銘文の約８分の１に満たないが、五山文学の影響が強くなった 14 世紀の鐘には例外的に多い［坪井 1970、33-34 頁］。横岳山崇福寺は臨済宗大応派（横岳派）であり、本鐘の場合は五山文学の影響が反映しているといってよいだろう。

図 13　第一次追銘（第四区）（西村 2001）

図 14　第二次追銘（第三区）（西村 2001）

b. 第一次追銘

（第四区）（図 13）

防州大嶋屋代庄　畑村
為驚覺一切衆生昏迷
拔済自他群生沈苦以諸人
助力買取之所安置也
仍各々施主等現當悉地
決定成就乃至法界平等利益
明應七年戊午十月十八日大願主浄泉
勧進沙門恵三

この追銘から、筑紫神社に奉納された鐘は、約１世紀後に「防州大嶋屋代庄畑村」に移ったことがわかる。「防州大嶋屋代庄畑村」は現在の山口県大島郡周防大島町東屋代字畑に比定される。永山氏が昭和 16（1941）年に周防大島町小松在住の矢田部與市氏に聞いたところによると、古来は数寺あったといい、「自性院屋敷」という水田や「自光寺（地廣寺）」という小字が残る。また、『志駄岸八幡宮縁起』（周防大島町小松）には、自性院が志駄岸神社の神宮寺であり、永享８（1436）年に疫病が流行った際に千部会を行った記録が残る。自性院は元禄年間（1688-1704）に無住となり、明和６（1769）年に小松町へ移り、明治維新の際に長命寺と改称し現在に至るという。矢田部氏は、明応７年段階で勢力があった寺は自性院であろうから、鐘が移った先は自性院であろうとする［永山 1954、323-324 頁］。

移った経緯は「買取之所安置也」とある。つまり、何らかの理由で筑紫神社は鐘を売りに出さざるを得なかったのであろう。この理由の１つとして考えられるのが明応の政変である。

明応の政変とは、明応２（1493）年畿内において室町幕府管領細川政元が第 10 代将軍足利義材を廃位し、新将軍義高を擁立するクーデターが勃発した。この事件は幕府内における政権闘争に留まらず、九州にも影響を与えた［堀本 2000］。

少弐政資は、応仁・文明の乱（1467-77）の勃発によって大内政弘が上京すると、その隙をついて旧領筑前・豊前両国を奪回し、太宰府に復帰した。しかし、京都における戦乱が終結した翌年の文明 10（1478）年８月に政弘が九州に渡海し、豊前・筑前両国を一挙に制圧して博多に入ると、政資は肥前方面への撤退を余儀なくされた。少弐氏の政治的・軍事的な最大の課題は、大内氏に奪われた筑前等旧領の回復であり、大内氏に対抗しうる新たな軍事力を再編成するため、肥前支配の強化を進めた［堀本 2000］。

当初、政元のクーデターは順調に進んだが、亡命した義材は御内書を九州の諸将に発した。義材は大内氏および九州の勢力に政権奪還の期待を寄せた。少弐氏は大内氏と敵対関係にあったので、大内氏への対抗上、必然的に足利義高・細川政元派に結びつかざるを得ない状況にあった。中央政界の対立は、応仁・文明の乱後、筑前を退去していた少弐氏にとって勢力回復の絶好の契機となり、少弐氏は明応５（1496）年北部九州一帯を巻き込む軍事行動を展開した。明応６（1497）

年３月 15 日、筑前国御笠郡筑紫村および同地と境を接する肥前国基肆郡基山で、少弐・大内両軍は激突し、少弐氏は大きな被害を受けた。『光浄寺文書』に収める少弐氏歴世次第書には、政資・高経父子が明応６年４月にともに自害したと記す［堀本 2000］。この戦において、これまで少弐軍の主力を構成してきた筑紫氏が少弐氏から離反し、大内氏に属するようになった［堀本 1999］。

鎌倉時代以降、筑紫氏が筑紫神社の社司を兼ねていたという［鷺山 1999、森 2017］。明応７年に周防国に鐘が移動した契機は、筑紫氏が明応の政変後に大内氏に帰属した証として鐘を差し出したとは考えられないだろうか。

c. 第二次追銘

（第三区）（図 14）

経云
一打鐘聲　當願衆生
脱三界苦　得見菩提

備前國邑久郡長船村
横山元之進藤原祐定
為先祖代々菩提寄附之
明治二十年丁亥秋吉辰

住職長樂行覚代

（内面）

備前州邑久郡
長船村慈眼院主
行覚和尚化縁廣
灵婆塞雲集就
中横山祐定氏意
楽自捨浄此　鋳造
犍椎以報酬四恩
数年于此焉今玆
明治二十年秋偶感
得古鐘蓋往古
筑紫神前処置之
物而後備前太守池
田侯寄附佛心寺
者也矣終横山氏
宿志永附當寺之
維那亦奇縁乎哉
和田大円謹誌

この追銘からは「防州大嶋屋代庄」から再転し、「備前太守池田侯」が岡山市仏心寺に寄附したことがわかる。

仏心寺は、『社寺旧記』（池田家文庫）によれば、備前岡山藩主２代池田綱政の姉一条教輔夫人輝子が比叡山安楽院（安楽律院）に帰依していたことから、岡山寺観音坊（岡山市）の円然が天台宗寺院建立を働きかけ、正徳４（1714）年に寺地が公許され、綱政の子継政も金一千両・寺領一〇〇石・山林を寄進したという。また『吉備温故秘録』では、輝子の発願により擢山（岡山市操山）のうち二町余を寺地として草堂を建て、在中であったが岡山城下町分の寺となったのが始まりと記す。当初は小庵であったが、宝暦７（1757）年継政の命により現在の岡山市湊に移されたという。

明治 18（1885）年頃、長船最後の刀匠である横山元之進祐定（すけさだ）（-1929）が本鐘を岡山市の古物商より 60 円で買入れ、明治 20 年に瀬戸内市慈眼院へ寄進した［永山 1954、326 頁］。

２．関係寺社・人物

ここでは、慈眼院鐘が当初奉納された筑紫神社や、原銘を揮毫した崇福寺、本鐘製作時に筑紫神社の社司だったと考えられる筑紫氏について述べる。

（１）筑紫神社

主祭神は筑紫神（五十猛命（いたけるのみこと）・白日別命（しらひわけのみこと）（筑紫の国魂（くにたま））とする説もある）である。坂上田村麻呂（さかのうえのたむらまろ）（田村大神）と玉依姫命（たまよりひめのみこと）（宝満大神）を合祀する。この２柱がいつから合祀されたかは不明だが、延宝９（1681）年の『筑紫神社縁起』にはすでに見られ、坂上田村麻呂は中世に筑紫神社の祭祀を司っていた筑紫氏の先祖であるため、玉依姫命は御笠郡の惣社であるためとする［森 2017］。

筑紫神は貞観元（859）年正月 27 日に従五位下から従四位下に、さらに元慶３（879）年６月

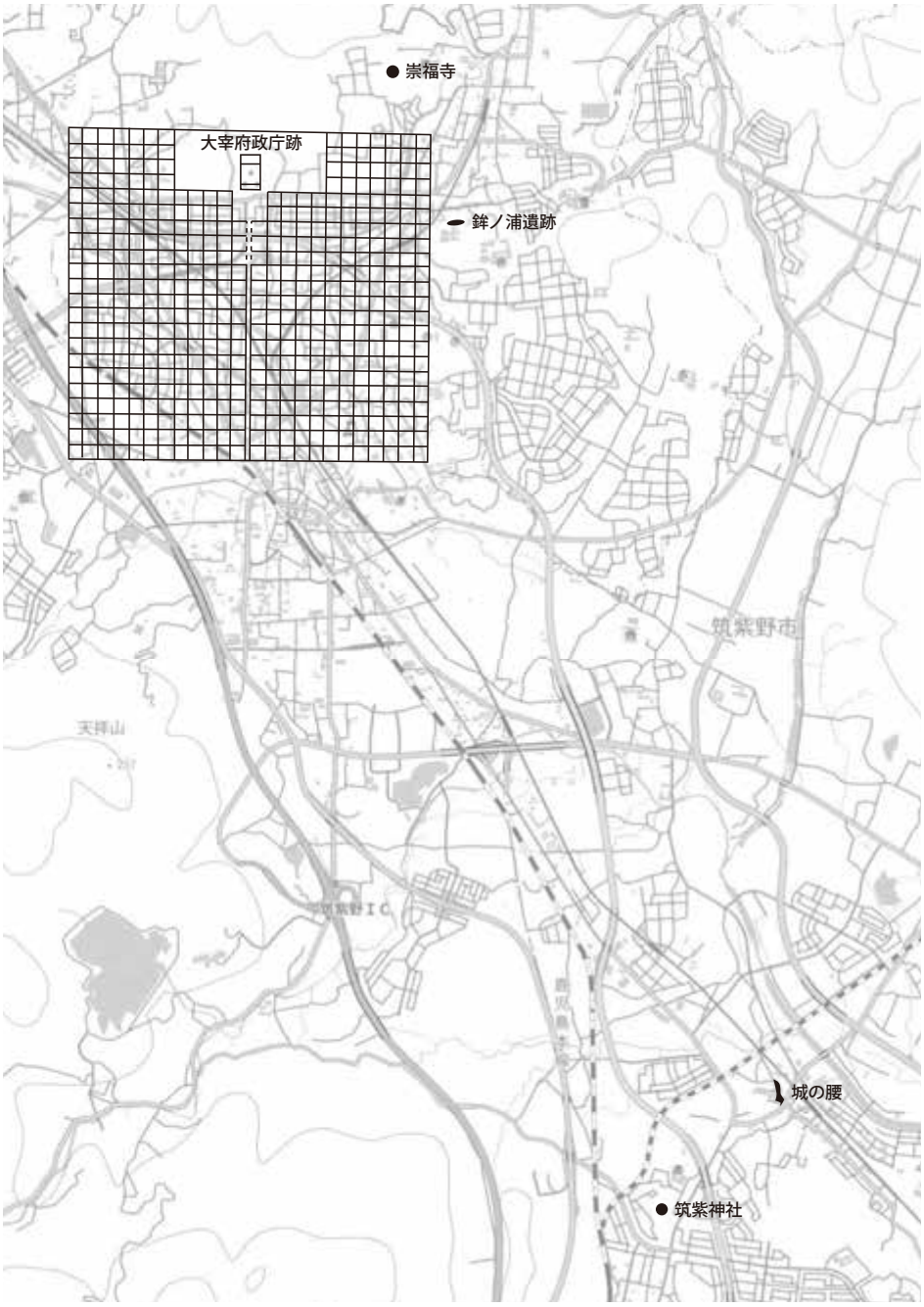


図 15　筑紫神社旧鐘関係位置図

8 日に従四位上に昇叙した（『日本三代実録』）。なお天元 2（979）年 2 月 14 日付太政官符（『類聚符宣抄』）によれば、「住吉・香椎・筑紫・竈門・筥崎等の宮は大宮司を以て貫主となす」とあり、天延 2（974）年には他の大社と同じように大宮司職が置かれていた［森 2017］。

10 世紀末頃に編纂の『延喜式』神名帳には「御笠郡筑紫神社一座、名神大」と記載され、名神大社に列する。式内社として神名帳に記載された神社は、平安時代初期に官社とされた神社で、後世まで高い格式の神社として扱われた。現在の福岡県にあたる地域では二六座一六社、筑紫地区では竈門神社と筑紫神社のみである［森 2017］。

筑紫神社は「筑紫」という国号の起源の神社とされる。『筑後国風土記』逸文には、筑紫の地名の由来を 4 つの説話をあげる。その 1 つに筑後国と筑前国との境に荒ぶる神（麁猛神（あらくたけきかみ））がいて、その神のために通行する人の半分が死んでしまうため「人の命盡（つくし）の神」とよばれた。そこで、筑紫君と肥君（ひのきみ）がこれを占い、筑紫君の祖の甕依姫（みかよりひめ）を祝（はふり）

として祀ったところ神害はなくなった。そこで、この神を「筑紫神」と言うようになったという。『筑前国続風土記拾遺』ではこの説をとり、筑紫神社の祭神は麁猛神であり、この土地に鎮まる土地神であろうとする。また、筑紫神社は竈門神社と異なり、他の地域に勧請された形跡がないので、塞神的な境界を鎮護する神であろうとも考えられている［鷺山 1999］。

所在地については「城山」の山頂から麓に移されたとする説（『筑前国続風土記拾遺』）と、当初より現在地であったとする説（『筑前国続風土記』）の両説がある。

鎌倉時代からは少弐氏庶流の筑紫氏が社司を兼ね、当初は当社のほとりに居た。（『太宰管内志』『筑前国続風土記』）。その後、「城の腰」と呼ばれた筑紫村の東方の小高い山に、筑紫氏が社司だった時の旧宅跡があったという（『筑前国続風土記』）。享徳 2（1453）年筑紫能登守経門・同左近将監俊門が社殿を造営した記録が棟札に残る。この頃、『筑紫神社縁起』によると、原田宿の南の外れにある祇園社を御旅所として神幸が行われていた。しかし、戦国時代には筑紫氏が勝尾城（佐賀県鳥栖市）に本拠を置き、天正 14（1586）年島津勢に攻められ落城した際、筑紫神社の神領も没収、神宝・古文書類も兵火に遭い、祭りも途絶えたという［森 2017］。

江戸時代には、筑紫氏の流れを汲む山内氏が社職を継いだ。寛文 2（1662）年造営の社殿は、延宝 8（1680）年火災に遭うが、翌年に筑紫・原田の村人が神殿・拝殿・大門を再興した。元禄 12（1699）年銘の石鳥居は、額の揮毫を花山院定誠が、両柱の銘文を官梅道栄が記す。原田・筑紫両村の産土神で、境内には薬師堂、観音堂などがあった（『筑前国続風土記附録』）。江戸時代までは神仏習合していたことがうかがえる［森 2017］。

（2）横岳山崇福寺

仁治元（1240）年、南宋から帰国した随乗房湛彗が大宰府の横嶽に建立した。湛慧は顕密（旧仏教）の教学を修めて入宋し、南宋五山の第一位興聖万寿禅寺（中国浙江省杭州府、通称は径山）の無準師範のもとに参じた僧であった。修行を終え日本に帰国する際に、湛彗は、同じ無準に参ずる円爾弁円との間で、帰国したら一寺を建立して円爾を招聘することを約束した。湛慧は円爾の弟子でもあった。同 2（1241）年に帰国した円爾は、当初の約束通り、湛慧の請いに応じて崇福寺の開堂式を行い、南宋より将来した無準直筆の「勅賜万年崇福禅寺」の八大字額を掲げて禅法を挙揚した（『聖一国師年譜』）。円爾による崇福寺の開堂は、太宰府の地で博多禅の展開が本格的に始まったことを示す。

その後、崇福寺は円爾の管掌する禅寺として、同じく円爾が開山した博多承天寺と同様の歩みをした。文応元（1260）年には南宋の名僧兀庵普寧が崇福寺に止宿し、文永 6（1269）年には円爾の弟子で南宋に渡海した山叟慧雲が承天寺から移るなど（『山叟和尚語録』、『古尊宿語録』）、対外交流と接する性格を有した。また、寛元元（1243）年、有智山寺（太宰府市）の衆徒が新興勢力である円爾の寺を圧迫したため、崇福寺は承天寺とともに勅命によって官寺に加えられた（『聖一国師年譜』『元亨釈書』）。弘安 3（1280）年、死期を迎えた円爾が京都東福寺関係の後事を定めた規式には、承天寺を円爾の法房（円爾の寺）とし、崇福寺のことも東福寺が責任を持って処理することが明記されていた（同年 6 月 1 日「東福寺規式」『東福寺文書』／『鎌倉遺文』18 号）。このなかで少弐経資（資能の子）が、檀那として崇福寺を扶持していたことも書かれており、両者は強固な関係で結ばれていたことがわかる。

湛彗はわずか 1 年の在寺の後上京したため、文永 9（1272）年に南浦紹明（大応国師）を招請し住持とした。当時、崇福寺と少弐氏は一体関係にあった。南浦は、少弐資能との関係も密接だったようで、資能の死に際して、彼は非常に丁重な詩文を残した（『大応録』巻下「太宰府都督少卿禅門秉火」）［伊藤 2007］。南浦の崇福寺滞在は、以後 33 年の長きにわたって継続した。京都大徳寺を開いた宗峰妙超（大灯国師）はもともと高峰顕日（仏国国師）に師事していたが、次第に南浦に参禅することを望んだ。当時既に後醍醐天皇の

厚い帰依を受けていた宗峰は、太宰府へ下る意思を天皇に伝えたが許されなかった。元弘元（1331）年少弐頼尚の請いによって夏安居の間だけ崇福寺へ下ることを許されたという［渡辺 1998］。

天正 14（1586）年島津氏が岩屋城の高橋紹運を攻略した際に兵火で焼失、慶長 5（1600）年筑前に入国した黒田長政が博多の千代に移し、福岡藩主の菩提寺として再興した。

（3）筑紫氏

中世に筑紫神社の社司を務めた筑紫氏の出自はよくわかっておらず、①筑紫神社神主、②少弐氏の一門、③筑紫氏（出自不明）、④坂上田村麻呂子孫、⑤足利直冬落胤などの説がある。このうち②～⑤は少弐氏と何らかの関係をもって筑紫氏が創設されたとする点において共通する［堀本 1999］。

筑紫氏嫡流に伝来した文書群の中で最も古い内容をもつのが「十二ノ巻」（『筑紫家資料』1 号、福岡市博物館蔵）である。計 19 通の内、15 通は少弐氏関係で、これらの文書群は、筑紫氏が少弐氏一族である武藤白幡氏の遺跡の一部を継承したことの反映と考えられている。また、筑紫氏の史料上の初見は、ここに収める応永 7（1400）年 3 月 11 日付「筑紫次郎宛少弐貞頼知行充行状写」である。これらのことから、筑紫氏は応永 7 年以前にすでに存在し、系図類を整合的に考えると、筑紫氏は少弐氏の直接の子孫というよりは、むしろ婚姻関係を通して少弐氏と縁を結ぶことによってその一門に列し、少弐氏の有力家臣となったとされる［堀本 1999］。

3．類例の検討

（1）現存鐘との比較

坪井氏は、九州には筑前芦屋、豊前小倉・今井、豊後高田・南部、肥前、肥後に梵鐘を製作した鋳物師組織がおり、日向・大隅・薩摩には、中世鋳物師の本貫地は見当たらないとする。日向など三国の鐘については、薩摩藩が幕末にほぼ鋳潰し、残ったものも西南の役に西郷軍が徴発して兵器に鋳替えたため、中世を通じてその土地の鋳物師が作った鐘は見出せず、記録にみえるものも他国の

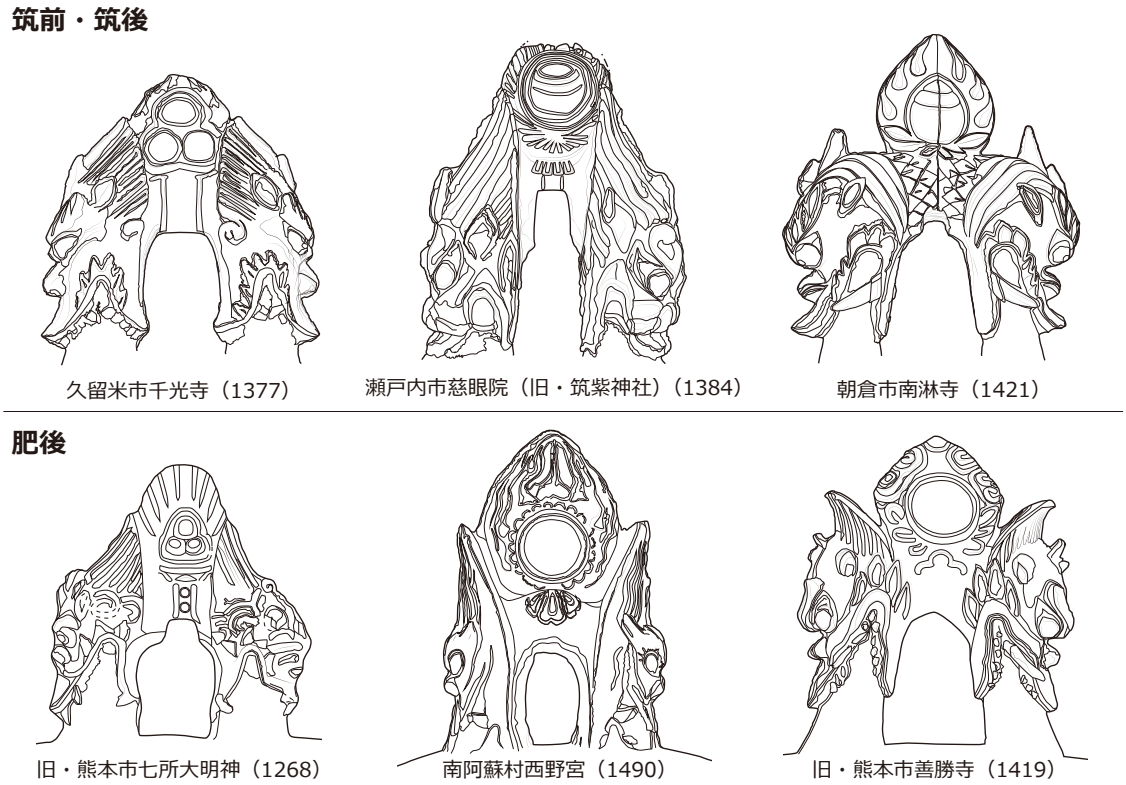


図 16　筑肥地域の本貫不明梵鐘竜頭実測図（筆者作成、縮尺不同）

所在地	西暦	鋳物師	銘文	上帯	中帯	草の間	下帯	乳の数	上帯分割	湯口系	駒の爪
【筑前南部・筑後】											
千光寺	1377年	大工藤原資国	陰刻	―	―	―	―	4×4	上帯中央	A2	2段
慈眼院	1384年	―	陰刻	―	―	―	―	4×4	上帯中央	A2	2段
南淋寺	1421年	大工藤原左近衛将監沙弥宗久	陰刻	**雲文**	―	―	**蓮華唐草文**	4×4	**上帯上端**	A2	2段
【肥後】											
法浄寺	1268年	―	陰刻	―	唐草文	蓮華唐草文	―	4×4	上帯中央	A2	2段
利明寺	1419年	大工氏国	陰刻	―	―	―	―	4×4	上帯中央	**A3**	2段
			陽鋳？								
西野宮	1490？年	―	陰刻	―	―	唐草文	―	**3×3**	上帯中央	A2	2段

表1　筑肥地域の梵鐘の様式と技術

鋳物師の製品だけである［坪井 1970、297-300頁］。

しかし、西村氏は筑前南部・筑後・肥前・肥後北部を「筑肥地域」と呼び、筑肥地域にも鋳物師組織がいた可能性を指摘する［西村 1987］。氏は、慶長12（1607）年銘の久留米市玉垂宮鰐口（亡失）の銘文で筑後国瀬高（現・福岡県みやま市）に平井（平）姓鋳物師がいたことから、延慶3（1310）年銘の熊本県玉名市浄光寺鐘（亡失）の「大工平吉近」や、永享7（1435）年銘のみやま市二尊寺鐘（亡失）の「大工平朝貞」は、瀬高鋳物師であるとした。

本鐘は、従来知られていた本貫地だけでなく、大宰府や瀬高といった筑肥地域の鋳物師が製作した可能性も考慮すべきであろう。

a. 様式

筑肥地域の本貫不明の梵鐘と比較すると、本鐘の竜頭の宝珠を高く突き出す形や、上方向に伸びたたてがみ、宝珠下の蓮華座が形骸化している点は、熊本県阿蘇郡南阿蘇村の下田西宮神社鐘（延徳2（1490）年銘だが、銘文に作為の痕跡があるため検討を要する）と共通する。下田西宮神社鐘の竜頭は高さ18.5㎝で、法量も近似する（図16）。

また、久留米市千光寺鐘（永和3（1377）年）と八代市法浄寺鐘（熊本市七所大明神（現・宮地神社）旧鐘）（文永5（1268）年）の竜頭は、宝珠を品字状に配し、頸部を垂直の隆起線で区画する点が共通する。坪井氏は、七所大明神旧鐘を河内鋳物師の作とした［坪井 1976］。

朝倉市南淋寺鐘（応永28（1421）年）と天草市利明寺鐘（熊本市善勝寺旧鐘）（応永26（1419）年）の竜頭は、宝珠が竜のたてがみから離れて独立する点、竜の口が笠形に接さず棒状の環を食む点、口周りの髭の表現、長い牙を突き出す点が共通する。

したがって、筑肥地域の本貫不明の梵鐘には、様式的に共通がみられる。これは、西村氏が指摘する筑肥地域の鋳物師組織を考える端緒になろう。

b. 製作技術

筑肥地域の本貫不明の梵鐘の鋳型分割位置と湯口系をまとめたものが表1である。筑肥地域の本貫不明の梵鐘のうち、南淋寺鐘以外は上帯中央で鋳型を分割する。南淋寺鐘は上帯への施文のため、鋳型分割位置が他と異なるのだろう。上帯中央での鋳型分割は、河内系鋳物師本流に多く、同時期の北部九州の鐘でも一般的である［新郷 2020］。湯口系は、利明寺鐘はA３型、それ以外はA２型で共通する。A２型の湯口系の初出は、延喜17（917）年銘の奈良県栄山寺鐘である。いっぽう、A３型の湯口系の初出は、平治2（1160）年銘の静岡県袋井市出土鐘である。このA３型は、小型梵鐘に試行的に採用された新式の湯口系であったと考えられている。畿内では13世紀になるとA２型が徐々に減少し、A３型が盛行する。つまり、畿内では湯口系はA２型からA３型へと進化した［五十川 2016］。九州でのA３型もA２型からの進化と思われる。

したがって、南淋寺鐘を除く筑肥地域の本貫不明の梵鐘は、製作技術が共通していたといえる。

参考として、既知の筑肥地域の鋳物師組織の作例を挙げよう。芦屋鋳物師は、「継ぎ中子法」という独自の中子製作技法を用いる。すべて和鐘で

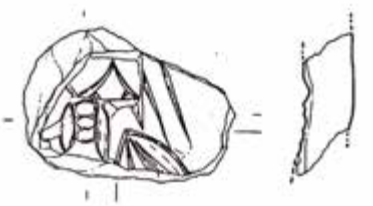


図 17　鉾ノ浦遺跡出土竜頭鋳型（太宰府市教育委員会 2001b）

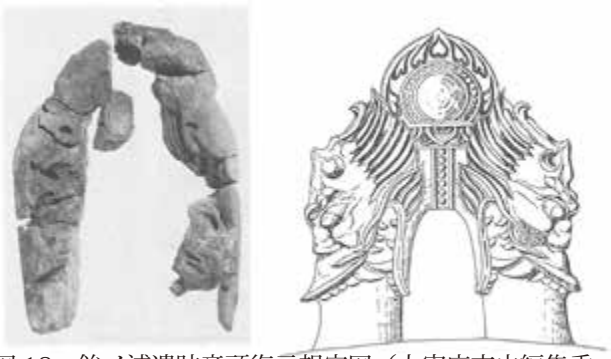


図 18　鉾ノ浦遺跡竜頭復元想定図（太宰府市史編集委員会 1992）

図 19　防府天満宮鐘（油山天福寺旧鐘）竜頭（大重 2016）

ある前期芦屋鋳物師［杉山 1998］の鐘の場合、上帯での鋳型分割は上帯中央、湯口系はＡ２型である。

松尾禎作氏が定義した、現存する「肥前鐘」６口のうち、筆者は滋賀県大通寺鐘（福井県小浜市多田寺旧鐘）（貞治２（1363）年）と佐賀県医王寺鐘（長崎県佐世保市宇都宮神社旧鐘）（永和２（1376）年）、福岡県英彦山神社鐘（旧奉納地・鋳造年不詳）の３口しか実見できていないが、上帯での鋳型分割は２口は上帯上端、医王寺鐘のみ上帯中央で、湯口系はいずれもＡ２型である。

坪井氏が定義した「肥後式」鐘は、上帯での鋳型分割は熊本県菊池市玉祥寺鐘以外は上帯中央、湯口系はＡ２型またはＡ３型である。玉祥寺鐘のみ最上段での鋳型分割が乳の間上端下である。

よって、南淋寺鐘を除く筑肥地域の本貫不明の梵鐘と「肥後式」鐘は、上帯中央での鋳型分割、Ａ２型またはＡ３型の湯口系で、共通の製作技術を有していた。肥の国でも肥前と肥後では様式だけでなく製作技術も異なる。また、筑前芦屋は独自の中子製作技術を有し、中世の段階では他の鋳物師組織との技術共有はなかったようだ。

（２）太宰府市鉾ノ浦遺跡出土鋳型との比較

先にも触れたが、西村氏は、本鐘は大宰府の鋳物師が製作したと推定［西村 1987］、太宰府市太宰府天満宮の慶長５（1600）年銘の鰐口から、①願主や檀越が少弐氏およびその親近の武将で

図 20　鉾ノ浦遺跡出土竜頭鋳型（太宰府市教育委員会 2001b）

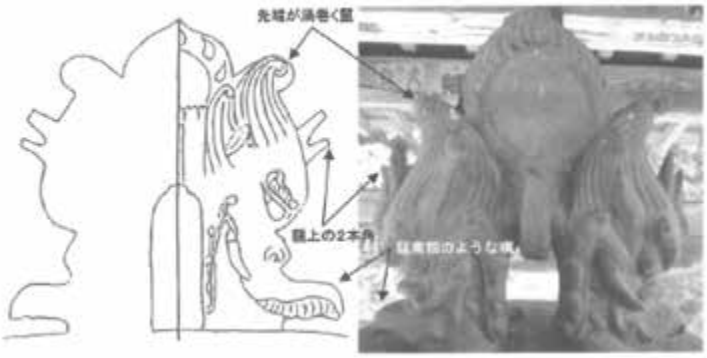


図 21　物部姓鋳物師作梵鐘 の竜頭の特徴（村上 2020）

あったこと、②平井姓もしくは「惣官大工」を称すること、以上２点を満たすものを大宰府平井姓鋳物師とし、大宰府地方両筑から肥前が活動範囲であったとした［西村 1978］。

以前は、職人に関わる中世以前の文書は、そのほとんどが偽文書だとする見解もあった。しかし、網野善彦氏をはじめとする研究者が精力的に関係史料を蒐集し、綿密・周到な考証をすることで、各地の鋳物師の手許にも真正な中世文書があることがわかった。『阿蘇品文書』[阿蘇品 1971] は、11 通のうち他家の文書と重複するのは 4 通のみで、あとはすべて独自の案文であり、案文の作成された時期が南北朝後期であることが明らかとなった［名古屋大学文学部国史研究室 1982］。このうち、嘉禎２（1236）年 10 月 7 日付「六波羅施行状写」は、「鎮西鋳物師」の初見史料である（『鎌倉遺文』5059 号）。また、康永元（1342）年 7 月 11 日付「少弐頼尚裁許状写」には、「大宰府鋳（物）師」が初出する。だが、これ以前から古代の大宰府の銅竈工や作物所に属した工人としての独自の伝統を背景に、ある程度の組織化はなされていたと推定されている［本多 2002］。

太宰府市鉾ノ浦遺跡は、中世の大規模な鋳造工房の遺跡である。民俗例から、職人が出吹きと称して需要地で臨時的に仮説作業場を設ける場合もあるが、鉾ノ浦遺跡では梵鐘鋳造土坑や鋳型の出土だけでなく、作業場が複数ブロック集合していることから、恒久的な大型鋳造工房であったと考えられている。鋳造工房の隆盛期は 13 世紀後半～ 14 世紀初頭で、50 年から 80 年程度の操業期間が想定されている [太宰府市教育委員会 2001a]。これは、「少弐頼尚裁許状写」内の「大宰府鋳（物）師」だけでなく、弘安７（1284）年銘薩摩浄光寺鐘（亡失）の「鋳師太宰府住人丹治恒頼」とも時期が重なる。

鉾ノ浦遺跡出土の梵鐘鋳型で着目すべき点は、竜頭の蓮華座下の頸部に連珠文を施す点である（図 17・18）。現存鐘では、大和鋳物師［杉山 1995］が造った奈良県栄山寺鐘（延喜 17（917）年）や兵庫県徳照寺鐘（長寛２（1164）年）、京都府称名寺鐘（承元４（1210）年）、河内鋳物師

所在地	西暦　鋳物師	文字の技術
茨城県等覚寺	1206	ヘラ押し
京都府称名寺	1210	
和歌山県金剛三昧院	1210 多治比則高	ヘラ押し
福岡県東禅寺	1215 坂田家守	ヘラ裏彫り
栃木県中禅寺（亡失）	1216	
京都府広隆寺	1217	ヘラ押し
和歌山県弘法寺	1221	ヘラ押し
香川県千光寺	1223 土師宗友	ヘラ押し
奈良県千光寺	1225	ヘラ押し
神奈川県星谷寺	1227 源吉国	ヘラ押し
愛知県勝善寺	1230	ヘラ押し（埋け込みカ
兵庫県浄橋寺	1244	ろう型
埼玉県慈光寺	1245 物部重光	ヘラ押し
奈良県金剛山寺	1246 土師宗貞	ろう型
埼玉県野本寺（亡失）	1254	
神奈川県建長寺	1255 物部重光	ヘラ押し
埼玉県養寿院	1260 丹治久友・大江真重	
埼玉県勝楽寺	1261 物部季重	
山口県防府天満宮	1261 沙弥生蓮	ヘラ押し
神奈川県新長谷寺	1264 物部季重	ヘラ押し
兵庫県金蔵寺	1267	ヘラ押し
山口県極楽寺	1272 依継	ヘラ押し
佐賀県万寿寺（亡失）	1279 源守房	
山梨県久遠寺	1283 沙弥十念	
鹿児島県浄光明寺（亡失）	1284 丹治恒頼	
千葉県小網寺	1286 物部国光	
神奈川県箱根神社（亡失）	1296 礒部安弘	
埼玉県喜多院	1300 源景恒	ヘラ押し
静岡県清見寺	1314	ヘラ押し
奈良県増賀堂	1323	
和歌山県青岸渡寺	1324 河内介弘	
兵庫県蓮光寺	1325	
兵庫県英賀神社	1325□□光吉	
山梨県広厳院	1327 大江守光	
静岡県本立寺	1332	
岐阜県照蓮寺	1334	
神奈川県宝城坊	1340 物部光連	
奈良県個人蔵	1342	ヘラ押し
岩手県中尊寺	1343 藤原助信	ろう型
神奈川県本瑞寺	1344	
神奈川県清浄光寺	1356 物部光連	
秋田県安養寺（亡失）	1365	
奈良県石上神宮（亡失）	1376	

表２　13･14 世紀の陽鋳銘を持つ梵鐘（鈴木 2003 を参考に加筆作成）.

が造った大阪府願泉寺鐘（貞応３（1224）年）や香川県長勝寺鐘（建治元（1275）年）、和歌山県金剛峯寺鐘（弘安３（1280）年）等のように中央大工の作例に多くみられる。九州近隣の現存鐘では山口県防府天満宮鐘（福岡県油山天福寺旧鐘）（文応２（1261）年）があるが、これも中央大工の作だと考えられる（図 19）［大重 2016］。山口県正法寺鐘（正平 18（1363）年）は、河内鋳物師の手法とは懸隔があるが、大工大中臣弘義はその姓から河内鋳物師とされる［坪井 1970、289 頁］。よって、竜頭の蓮華座下の頸部にある

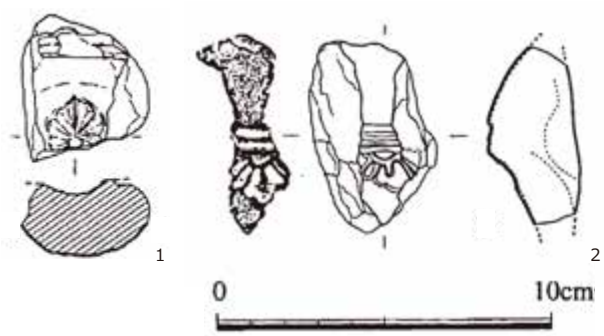


図 22　花菱形文様を持つ獣脚（1：大宰府条坊跡 111 次、2：204 次）（太宰府市教育委員会 2001a）

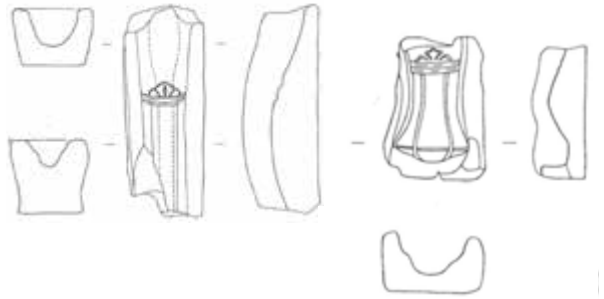


図 23　埼玉県金井遺跡出土獣脚（埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994）

連珠文は、中央大工の特徴といえる。大宰府に河内鋳物師の一派である丹治氏がいたことは、先に触れた弘安 7（1284）年薩摩浄光寺鐘の銘文からわかる。鉾ノ浦遺跡の場合は、丹治氏の定着の結果であろう。しかし、本鐘の竜頭には、蓮華座下の連珠文は見当たらない。

「肥前鐘」は、①竜頭の宝珠の隙間や火炎に透かしをもつ、②乳先端に突起がある、③駒の爪が二段、という特徴をもつ［坪井 1970、125-126 頁］。鉾ノ浦遺跡の鋳型は、②と③の特徴をもつという［山本・狭川 1987］。しかし、乳の鋳型とシリコンの型取り資料を実見したが、乳先端の小突起は確認できなかった。

むしろ、竜頭のたてがみの最上段が円錐形の渦巻きになる点（図 20・21）や下帯に唐草文を配する点、陽鋳銘をもつ点（表 2）は物部姓鋳物師の作例［村上 2020］に近いと感じる。なお、『三国名勝図会』によると、先に触れた薩摩浄光寺鐘は「文字は陽識にして鋳出せり」とあり、陽鋳銘だったことがわかる［坪井 1972、109 頁］。

埼玉県金井遺跡は、鉾ノ浦遺跡とともに中世の梵鐘鋳造遺跡の代表的な存在である。同遺跡も梵鐘鋳造土坑や鋳型の出土だけでなく、7 つのブロックに区画された作業場があることから、鋳物師組織の拠点的な工房跡と考えられている。時期は 13 世紀後半から 14 世紀で、鉾ノ浦遺跡の操業期間とも重なる。遺跡出土の梵鐘鋳型を基に形態復元を行ったところ、物部姓鋳物師の作風に近似したものであることがわかった［横浜市歴史博物館 2000］。金井遺跡第 22 号溝跡検出の獣脚鋳型には花菱形文様が付く。この文様は、物部重光作の寛元 3（1245）年埼玉県慈光寺鐘の草の間の唐草文様の中心意匠と全く同様の半截花文である（図 23）。よって、金井遺跡では、獣脚の花菱形文様は物部姓鋳物師と断定する材料とする［（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994、第 3 分冊 591 頁］。大宰府条坊跡 111 次と 204 次調査でも、花菱形文様をもつ獣脚の鋳型が出土しており（図 22）［太宰府市教育委員会 2001a］鉾ノ浦遺跡からも中心意匠が半截花文の唐草文が施された下帯の鋳型が出土している（図 24）［太宰府市教育委員会 2001b］。

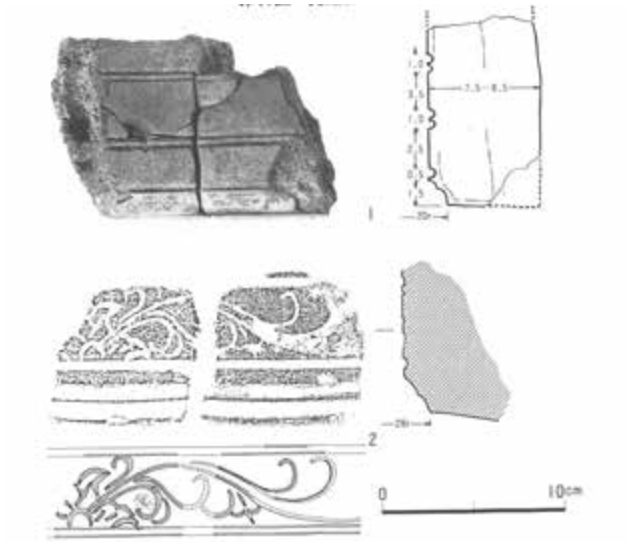


図 24　鉾ノ浦遺跡出土下帯鋳型（太宰府市史編集委員会 1992）

『真継文書』は、戦国時代に諸国鋳物師御蔵職（みくらしき）を継承した、下級公家である御蔵小舎人の真継家に伝来した古文書である。『真継文書』の特徴は、鋳物師支配に関係するものが多数存在することである。その内容は、戦国時代に真継久直・康綱が鋳物師支配をしようとした際の文書、江戸時代中期以降の鋳物師職許状・座法など鋳物師に配布した文書（偽文書）、鋳物師の名簿や鋳物師か

らの収入帳簿、の大きく３つに分けられる。このうち天文年間（1532-55）の『真継文書』の中には、久直と大宰府鋳物師との交渉を示す文書がある。天文 18（1549）年９月４日付「大宰府鋳物師年貢銭注文」にみえる「九州惣官大工東藤右衛門尉安秀」の流れをくむ平井氏は、宰府六座（手工業者組織）の一つ鋳物座の家である。文治５（1189）年３月 10 日付「源頼朝下文写」と同年６月 20 日付「大宰大監惟宗某施工状写」は、真継家に伝来した偽文書であるが、どちらも大宰府鋳物師平井氏と深い関りのある文書である。着目すべきは、この２通の偽文書がその特権の由来を頼朝に求めている点である。網野氏は、これらの偽文書が鎮西鋳物師の独自の伝統を背景に偽作されたものと考え、東国と九州との深い関りの一端がここに表れていると指摘する［名古屋大学文学部国史研究室 1982］。物部重光作の建長７（1255）年神奈川県建長寺鐘の大檀那は執権北条時頼であり、物部国光・同依光作の正安３（1301）年神奈川県称名寺鐘の大檀那は金沢顕時、物部国光作の正安３年神奈川県円覚寺鐘の大檀那は執権北条貞時と、鎌倉政権の中枢が物部姓鋳物師の後ろ盾であった［原田 2000］。鉾ノ浦遺跡出土の鋳型に物部姓鋳物師の作例との類似がみられることから、大宰府鋳物師が鎌倉殿に鋳物師特権の由来を求めたことは、単に「偽文書」として捨て去ってしまうのではなく、大宰府鋳物師の実態を捉えていくための手がかりになるのではないだろうか。中世の大宰府鋳物師がどのように成立したかは、今後の課題としたい。

なお、鉾ノ浦遺跡の未報告資料の中に、四角形を 45 度回転させたものを４つ組み合わせた文様が施された鋳型がある。この未報告資料の文様は、隅立ての四つ目結のようにみえ、少弐氏の家紋である寄懸目結に酷似する。少弐氏は、武藤資頼が大宰府の次官である大宰少弐に任命されたことに始まるが、それまでは武藤と称した。武藤氏は目結を家紋とし、武藤氏の流れの少弐氏や筑紫氏は目結を家紋とする［髙尾 1990］。西村氏は、大宰府の鋳物師は少弐氏の庇護下にあったとし［西村 1987］、鉾ノ浦遺跡は少弐氏の邸宅とも地理的に近い［山本・狭川 1987］。本資料は少弐氏の注文に応じて造られた製品であった可能性もあるのではないだろうか。

14 世紀中頃から 15 世紀には大宰府鋳物師の史料・遺跡の空白がある［山本・狭川 1987］。先にも触れたように 16 世紀末になると、太宰府天満宮門前町（五条地域を含む）に寺社に付属した商工業の特権的団体「六座」が成立した（『平井文書』）。その一つが鋳物座で、文禄元（1592）年には鋳物座の代表「鋳物屋平井与作」の名がみえる（『髙嶋家文書』）［太宰府市 2004］。中世の大宰府平井姓鋳物師の唯一の現存品は、慶長５年銘の太宰府天満宮鰐口のみであり、本鐘との比較は難しい。

４．まとめと課題

ここまでみてきたように、考古学的な様式研究から、本鐘の製作地には芦屋と大宰府の２つの説がある。筆者が実見したところによると、芦屋鋳物師に特徴的な「継ぎ中子法」の痕跡を確認することはできなかった。

本鐘は、太宰府と地理的に近く、関わりが想定できる。しかし、現状では直接的な証拠は見出せない。

製作技術の一つである鋳型分割位置と湯口系は筑肥地域に共通したものなので、西村氏が提唱した筑肥地域の鋳物師組織が造った可能性がある。それが瀬高か未知の本貫地（久留米や柳川等）かは今後の課題としたい。

謝辞

本研究は公益財団法人髙梨学術奨励基金の助成の成果である。

慈眼院鐘の実見では、慈眼院ご住職の土居龍桓様とそのご家族の皆様に、太宰府市鉾ノ浦遺跡の資料調査では、太宰府市教育委員会の遠藤茜様にご高配を賜った。また、福岡大学大学院のゼミにおいて、桃﨑祐輔先生や太宰府市教育委員会の髙橋学様、河野摩耶様、福岡市博物館の朝岡俊也様、上峰町教育委員会の吉岡暁様、春日市教育委員会

の濵邉空様、考古学研究室の同輩に貴重なご教示を賜った。記して感謝申し上げます。

【参考文献】

阿蘇品保夫 1971「中世鋳物師組織の推移試論―阿蘇品鋳物師文書の紹介をかねて―」『熊本史学』第 39 号 熊本史学会
五十川伸矢 2006「日本古代の梵鐘と中世の梵鐘」『鋳造遺跡研究会 2006』鋳造遺跡研究会
五十川伸矢 2008「鋳物生産の民俗例と解説図」『いもの研究』17
五十川伸矢 2016『東アジア梵鐘生産史の研究』岩田書院
五十川伸矢 2017「日本中世前期の梵鐘生産－河内鋳物師とその周辺の鋳物師－」『鋳造遺跡研究会 2017』鋳造遺跡研究会
伊藤幸司 2007「中世の崇福寺」『大応国師七百回忌記念特別展―大応国師と崇福寺』福岡市美術館
遠藤喜代志 2008「芦屋釜の技術復興―（その 1）挽き中子」『アジア鋳造技術史学会　FUSUS』 1 号 アジア鋳造技術史学会
大重優花 2016「油山天福寺鐘と沙弥生蓮」『古文化談叢』第 77 集 九州古文化研究会
（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994『金井遺跡 B 区 9』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 146 集
鷺山智英 1999「ムラの神と仏」『筑紫野市史 民俗編』筑紫野市史編さん委員会
新郷英弘 2020「北部九州の鋳物師と琉球の鐘」『鋳造遺跡研究会三〇周年記念論集〈鋳造遺跡研究資料二〇二〇〉』鋳造遺跡研究会
杉山洋 1995『梵鐘』日本の美術 第 355 号 至文堂
杉山洋 1998「琉球鐘」『佛教藝術』237 毎日新聞社
鈴木勉 2003「蘭渓道隆の建長寺鐘銘と物部重光の立体へら押し陽鋳銘」『梵鐘』第 16 号 日本古鐘研究会
髙尾平良 1990「筑紫氏について」『シンポジウム筑紫氏と鳥栖の山城―鳥栖の町づくりと歴史・文化講座―』鳥栖市教育委員会
太宰府市 2004『太宰府市史』通史編Ⅱ
太宰府市教育委員会 2001a『大宰府条坊跡ⅩⅥ―「鉾ノ浦」周辺の調査―』 大宰府市の文化財第 52 集
太宰府市教育委員会 2001b『大宰府条坊跡ⅩⅦ―鉾ノ浦遺跡（大宰府条坊跡第 47 次調査）―』太宰府市の文化財第 53 集
太宰府市史編集委員会 1992『太宰府市史考古資料編』
中川弘泰 1986『近世鋳物師社会の構造―真継家を中心として―』近藤出版社
永山卯三郎 1954『岡山県金石史 続 本編』岡山県金石史刊行会
名古屋大学文学部国史研究室 1982『中世鋳物師史料』
奈良国立文化財研究所 1993『梵鐘実測図集成』上・下奈良国立文化財研究所史料 37・38 集
西村強三 1978「太宰府天満宮の慶長五年在銘の鰐口について」『九州歴史資料館研究論集 4』九州歴史資料館
西村強三 1987「大宰府の金工」『大宰府の歴史』七 西日本新聞社
西村強三 1999「筑紫神社の旧鐘」『筑紫野市史 上巻　自然環境 原始・古代 中世』 筑紫野市史編さん委員会
西村強三 2001「筑紫神社旧鐘の拓本と鋳造手法について」『筑紫野市史　資料編（上）考古資料』筑紫野市史編さん委員会
坪井良平 1970『日本の梵鐘』角川書店
坪井良平 1972『日本古鐘銘集成』角川書店
坪井良平 1976「熊本県法浄寺鐘」『史迹と美術』第 461 号 史迹美術同攷会
原田一敏 2000「関東最大の鋳物師物部氏―その系譜と梵鐘―」『中世の梵鐘―物部姓鋳物師の系譜と鋳造―』横浜市歴史博物館
堀本一繁 1999「肥前勝尾城主筑紫氏に関する基礎的考察」『勝尾城下町遺跡』鳥栖市教育委員会 鳥栖市文化財調査報告書第 57 集
堀本一繁 2000「明応の政変と少弐氏」『福岡市博物館研究紀要』第 10 号
本多美穂 2002「Ⅱ　鎌倉時代」『太宰府市史　中

世資料編』太宰府市史編集委員会
村上伸二 2020「中世の関東における鋳物師の形態・動向（1）」『鋳造遺跡研究会三〇周年記念論集』鋳造遺跡研究会
森茂暁 2019『懐良親王　日にそへてのかれんとのみ思ふ身に』ミネルヴァ書房
森弘子 2017『ちくしの散歩　筑紫神社』筑紫野市教育委員会
山本信夫・狭川真一 1987「鉾ノ浦遺跡 (福岡県) ―筑前大宰府鋳物師の解明―」『佛教藝術』174 号
横浜市歴史博物館 2000『中世の梵鐘―物部姓鋳物師の系譜と鋳造―』
吉田晶子 2004「梵鐘鋳型の造型方法」『国立民族学博物館研究報告』29 巻 1 号
渡辺雄二 1998「崇福寺別院」『太宰府市史 建築美術工芸 資料編』太宰府市史編集委員会

資料紹介　王城山古墳群出土の瓶形土器

上田　龍児

1．王城山古墳群の調査研究略史

王城山古墳群は九州縦貫自動車動建設に伴う発掘調査により７世紀を中心とした群集墳が確認され、６点の新羅土器が認識・報告された（福岡県1977）。王城山古墳群出土新羅土器をめぐっては当初、小田富士雄氏や西谷正氏など九州の研究者により検討が進められ一定の位置付けがなされた（小田 1978、西谷 1984）。1990 年代以降には白井克也氏により詳細な再検討が加えられ（白井1999）、さらに江浦洋氏・重見泰氏・寺井誠氏など近畿を中心とした研究者や洪潽植氏など韓国の研究者にも取り上げられている。

以上、王城山古墳群の新羅土器は７世紀前後の日韓交渉を探る上では欠くことができない資料となっている。こうした中、筆者は平成 25（2013）年に王城山古墳群 B 群を調査する機会に恵まれ、新たに４点の新羅土器を確認し、平成 28（2016）年に報告書を刊行した（大野城市 2016）。さらに平成 29（2017）年には報告書の総括を基に、王城山古墳群そのものの再検討を行った（上田2017）。

2．資料紹介に至る経緯

平成 27・28（2015・2016）年ごろ、寺井誠氏が資料調査で大野城市に来訪した際、王城山古墳群 C 群 11 号墳出土資料の中で須恵器と報告されていた土器（福岡県 1977　fig42—18）（以下、当該資料）が新羅土器の瓶形土器と似ているとの指摘があった。筆者は大野城市文化財収蔵庫にて当該資料の捜索を行い、令和２（2020）年に所在を確認した。翌年には、寺井誠氏が再度資料調査に来訪の際に当該資料を実見していただき、寺井氏・上田双方確認の上で、新羅土器の可能性がある、という結論に至った。

本稿は当該資料の再実測・製図を行い、その観察結果に基づき資料紹介を行うものである。

3．王城山古墳群の概要と当該資料の出土状況

王城山古墳群は福岡平野東南部に位置し、海岸線からは 10km ほど内陸側の平野最奥部、乙金山西麓にあたる。周辺の善一田古墳群や古野古墳

図１　王城山古墳群と周辺古墳群の立地

群とともに総数 100 基を超える大規模群集墳を構成する（図 1）。王城山古墳群は A・B・C 群の大別３群があり、６世紀後半～７世紀後半にかけての総数 50 基ほどの古墳がある。さらに、C 群は５つの小支群に細分できる。

このうち、当該資料は C 群 11 号墳周溝（墳丘北東から南東にかけての山手側）で出土した。同古墳周溝ではスタンプ文を施す新羅土器長頸壺も出土しており、筆者が以前検討した結果では、北東側（山手側）に近接する C 群 12 号墳から流入した可能性を想定した（上田 2017）。したがって、当該資料についても新羅土器長頸壺と同様に本来 C 群 12 号墳に供献したものが流れ込んだものと想定しておきたい。C 群 12 号墳は直径 10m 弱の円墳で、墳丘内部に土師器甕・須恵器甕を多数埋納する点が特筆される。主体部は単室両袖の横穴式石室で、玄室は平面方形である。石室が大きく改変を受けていることもあり副葬品は貧弱であるが、石室内部から鉄鏃･鉄釘が出土したほか、墳丘裾や周溝で多数の土器が出土した。出土遺物や石室構造から築造時期は７世紀初頭～前半頃と考えられる。

４．資料の紹介（図 2）

ほぼ完形品の瓶形土器で、口縁部を欠く。高さ 12.5㎝以上、底部直径 7.5㎝である。体部は扁球形（胴部最大径は 15.4㎝）で、頸部は直立気味に立ち上がり、頸部付根の締まりは弱い。頸部上位で外側に屈曲し、口縁部へと連なる。底部は平底で、体部と底部の境はやや丸みを帯びた抹角平底である。肩部に２条１単位の細くシャープな沈線が巡る。外面の体部下半は工具ナデ、他は回転ナデで､内面は回転ナデによる凹凸が顕著に残る。内外面ともに灰色、底部外面は褐色で、断面の色調はサンドウィッチ状（破断面は明褐色）となる。胎土中に１～２㎜程度の白色砂粒を多く含み、一部５㎜大の砂粒もあるほか、１㎜以下の白色・黒色微粒子を含む。焼成は全体的に良好であるが、一般的な新羅土器と比べるとやや軟質である。底部付近のみ焼成不良で、褐灰色となる。以上、瓶形で平底であるという器形の特徴、回転ナデによる内面の顕著な凹凸・肩部外面のシャープな沈線といった製作技法の特徴や断面がサンドウィッチ状を呈す焼成の特徴から、新羅土器の可能性があるという考えに至った。

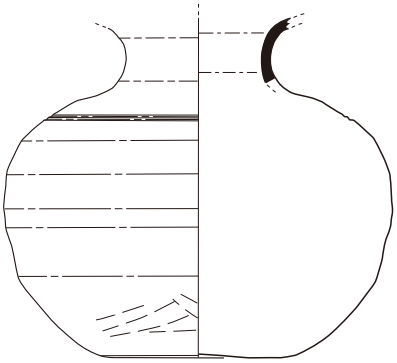


図２　瓶形土器実測図（1/3）

なお、当該資料は口縁部のみを欠損し、ほかは完全に残っている。口縁部の割れ口は新しいものではなく、意図的な打ち欠きの可能性もある。難波宮跡等の百済土器・新羅土器の瓶を検討した江浦氏は、これら土器の口縁部がいずれも人為的に打ち欠かれていることに注目し、内容物を運搬する際に蓋をするための細工であった可能性を指摘した（江浦 2008）。当該資料についても、同様の可能性があることを付言しておきたい。

新羅土器の瓶については、寺井氏による研究がある（寺井 2008）。無台でスタンプ文がない瓶については、６世紀第３四半期～第４四半期に中心があり、旧加耶地域を含む新羅の領域全体に分布することが明らかとなっている。また、形態的な変化として、底部と胴部の境が明瞭なものから不明瞭なものへと変化することが指摘されており、こうした特徴から、当該資料は新羅土器の瓶形土器のなかでも新しい様相のものと類似する。

５．まとめ

以上、当該資料について紹介し、諸属性から新羅土器の瓶形土器の可能性があることを述べた。今後、朝鮮半島における類例を探索し、位置づけを明確にしていく必要がある。

謝辞
　本稿の執筆に際し、寺井誠氏から多大なご協力・ご指導を賜った。記して感謝申し上げます。なお、土器の実測は上田、製図は小嶋のりこが行った。

【参考文献】
福岡県教育委員会 1977『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財報告－Ⅸ－』
小田富士雄 1978「対馬・北部九州発見の新羅系陶質土器」『古文化談叢』第5集
西谷正 1984「九州出土の朝鮮産陶質土器について」『九州文化史研究所紀要』29
小田富士雄 1988「対馬・北部九州発見の新羅土器」『古文化談叢』第19集
江浦洋 1988「日本出土の統一新羅系土器とその背景」『考古学雑誌』74－2
土井基司 1992「横穴式石室から見た群集墳の諸相－博多湾周辺地域を中心に－」『九州考古学』第67号
白井克也 1999「大野城市出土新羅土器の再検討－須恵器との並行関係ならびに流入の背景－」『福岡考古』第18号
洪潽植「日本出土・新羅土器の年代－7世紀代における新羅土器と須恵器の並行関係」『日韓古墳・三国時代の年代観（Ⅱ）』
江浦洋 2008「消えた口縁部」『発掘された大阪2007－水都大阪の国際交流史－』大阪府立弥生博物館図録38
寺井誠 2008「古代難波における2つの瓶を巡って」『大阪歴史博物館研究紀要』第7号
重見泰 2012『新羅土器からみた日本古代の国家形成』
寺井誠 2012「白村江前後の難波と筑紫－朝鮮半島から搬入された土器の検討を中心に－」『日本考古学協会2012年度福岡大会』研究発表資料集
大野城市教育委員会 2016『乙金地区遺跡群15』大野城市文化財調査報告書第139集
上田龍児 2017「福岡県大野城市王城山古墳群の再検討」『考古学・博物館学の風景』中村浩先生古希記念論集
上田龍児 2019「乙金古墳群の研究」『古文化談叢』第82集

【ふるさとラボ通信】『北平日記』を通してみた目加田誠氏

舟山　良一

1．はじめに

大野城心のふるさと館３階にはふるさとラボと名付けた部屋がある。この部屋では、中国古典文学者であった故目加田誠、日本古典文学者であった故目加田さくを氏夫妻の蔵書を、遺族から寄贈を受けて閲覧に供している。また、大野城市の文化財の特徴でもある特別史跡大野城跡と水城跡、そして国史跡牛頸須恵器窯跡など文化財に関する書籍も同様に配架している。大野城市在住の著名人の資料や文化財関係の書籍を閲覧に供することで、市民に郷土に対する愛着心を持ってもらいたいという主旨の下に設置された部屋である。本稿では、ふるさとラボの資料や目加田誠・目加田さくを氏の紹介を行っていきたい。今回は表題に示す通り、発見された目加田誠氏の北京留学時代の日記である『北平日記』を通して、目加田誠氏の人となりにせまってみたい。

2．『北平日記』の発見

『北平日記』が見つかったのは、平成 24（2012）年夏のことである。その前年の平成 23（2011）年秋に、大野城市は目加田誠・さくを氏夫妻の蔵書を遺族から寄贈を受けることになり、蔵書を自宅から市内小学校に搬出し、平成 24（2012）年 4 月から目録作成を開始した。

目加田夫妻の遺族から寄贈を受けたのは蔵書だけではなく論文執筆原稿その他の両氏の資料も含まれている。その中に『北平日記』と墨書きされた和綴じの小冊子が 8 冊含まれていた。誠氏の資料の整理に当たって指導を受けた九州大学文学部の竹村則行教授（現在名誉教授）、静永健助教授（現在教授）らの調査によって、『北平日記』は目加田誠氏が九州大学に助教授として赴任される直前に中国北京に留学した際の日記であることがわかった。日記には昭和 8（1933）年 10 月 14 日から同 10 年 3 月 4 日までの記述がある。出発は誠氏が 29 歳の時で、出発 3 か月前の 7 月に九州帝国大学法文学部助教授に着任したばかりだった。中国では 1928（昭和 3）年に蒋介石が南京を首都とし、北京は北平と改称されていたので、この名が付けられた。

『北平日記』は、九州大学中国文学会（代表静永健教授）によって、きわめて詳細な註が付けられて令和元(2019)年 6 月に書籍化された。(註 1) さらに、令和 4 (2022) 年 3 月には中国語版（註 2）が出版された。

3．目加田誠氏

目加田誠氏は明治 37（1904）年に生まれ、山口県の岩国で幼少時代を過ごした。厳格な父と優しい母に育てられたが、小学校 6 年の時に父を、中学 4 年の時に母を亡くした。このため、若くして小さな弟と妹の親代わりになった。苦学して東京大学に入り中国文学（当時は支那文学と言った）を学んだ。昭和 4 年に卒業し大学院に進んだが、翌昭和 5 年には当時の第三高等学校（現在の京都大学）に赴任した。そして、前述のとおり、昭和 8 年 7 月に九州大学に助教授として赴任し、10 月には留学のため北京へと旅立ったのである。昭和 10 年の帰国後は昭和 42 年の定年まで九州大学で教鞭を取られ、定年退職後は早稲田大学教授になり、昭和 49 年同大学退官後主には大野城市で過ごされた。氏は詩経を初めとして中国古典文学の研究を続けられ、昭和 60（1985）年に学士院会員となった。そして、昭和から平成の改元時に新元号考案者の一人に選ばれ、氏の案である「修文」が最終審査まで残ったとされている（註 3)。平成 6（1994）年 4 月逝去された。

『北平日記』の存在については家族も知らなかったとのこと。

なお、『北平日記』の内容紹介は大野城心のふ

るさと館のホームページ「ここふる学校」の一環として行ってきたが、小論はその内容を元に新たな項目を加えて書き直したものである。以下、小論の目的を果たすため選択した項目ごとに概観する。

4．『北平日記』からみた目加田誠氏

・ホームシックと宿

最初に住んだ部屋は中華民国（1911 ～）初めての軍人の邸宅であった古い屋敷の一部であった。荒れるに任せたような部屋で、『聊斎志異』(註4）に出てくる化物屋敷のようだと形容している。電灯もほの暗く、ひとりさびしく汚れた皿に盛り付けられた中国料理を食べながら、日本に残してきた妻、生まれたばかりの長女、そして妹、弟のことを思い出す（昭和 8 年 10 月 21 日)。長女の順子氏は、当時生まれたばかりだったが、刊行された『目加田誠「北平日記」』の跋文に「北京に着いて早々にホームシックにかかっている様子は、寂しがり屋の父を彷彿とさせて笑ってしまいました。私の知らない、記憶にもない日本での家庭団欒の場に、赤ん坊の順子も混じっていた光景は、まるでタイムマシンに乗ったかのように心が躍りました。」と寄稿されている。

このように、始めに落ち着いた部屋はなじめず、日本式の一二三館に決めた。しかし、本人には中国で日本式の旅館というのは不本意だったようで、また、旅館は費用がかかるため、下宿を探す。人の紹介で、昭和 8 年 11 月 30 日から中根さんという方の家を月 50 元で借りる。奥さんのます代さんの病のため節約して療養費を作ろうとしたのである。日当たりは悪いけれど心地はよさそうと記している。さらに、昭和 9 年 11 月 11 日から帰国する昭和 10 年 3 月 4 日まで銭稲孫氏の自宅に寄寓している（後述)。

・家庭教師

宿を決めると、中国語や中国の文化を学ぶため家庭教師に来てもらっている。中国語は張という青年、後には常啓光という青年（昭和 8 年 10 月 27 日)、文化は奚待園という老人に『紅楼夢』（註5）を読みながら学ぶ。ほかにも趙君（当時の満州出身）という大学生、愈君（江南の蘇州出身）という青年と交換教授を行った。奚待園という人は清朝の貴族だった人で、『紅楼夢』で描かれている貴族の生活を良く知り、著名な中国文学研究者であった吉川幸次郎も学んでいる。昭和 9 年 2 月 5 日の日記に、奚氏が以前宮中から賜ったという黄色の匂い袋を見せてくれたことが書かれているが、静永氏の註には西太后より賜った品かとある。

・食事

日記には、当然ながら食事についても記されている。着いた翌日（昭和 8 年 10 月 21 日）の食事風景では、「食事は支那人の厨子の作る所、一食 25 銭。朝は饅頭（余はこれに牛乳)、」とある。饅頭は餡の入っていない蒸しパンで、中国の一般的な朝食の一つだった。それから数日後の 10 月 26 日は外食をしているが、食べたのは烤鴨子というもので、炭火で燻製にしたアヒル肉をパイ生地などでくるんで食べるものだった。その料理店では店員が毛をむしったアヒルを何羽かぶら下げてきて客に選ばせる方式だったが、誠氏はそれをあまり良くは思っていないような書きぶりである。また、牛乳の感想は「薄くして駄目なれば断る。」（8 年 11 月 4 日）とあり、気に入らなかったようである。また、11 月 16 日には「食事粗末、栄養少なく、海苔を以って（餞別にもらいしもの）辛うじてすすむ。」とある。さらに、11 月 20 日には「潤明楼にて包子（肉まん）と麺を食す。旅館の栄養不足にして近頃身体痩せたるを恐るれば也。」とあり、留学当初は食事に苦労した様子が窺える。

・嗜好品

お茶は、夏は龍井（ロンジン)、冬は香片が良いと進められた。龍井は江南の杭州の西湖周辺で生産される中国で最も代表的な緑茶の銘柄である。香片はジャスミン茶のことで、茶葉にジャスミンの花びらをまぜたものである。誠氏は昭和 8 年 12 月 12 日に香片を半斤買っている。半斤は今の 250 グラムで、価格は 1 円 20 銭だった。その 10 倍もするものもあったとのこと。

タバコはルビークキン（ルビークイーン）とい

う銘柄のタバコを買っている。アメリカ製高級タバコで、昭和8年10月28日、11月14日などに書かれている。

・酒

誠氏はけっこう酒をたしなんだようである。昭和8年12月31日には、3人で夕食をとり、「我一人酒を飲み陶然となり」とある。翌9年1月26日には「近来（三・四日以前より）少し晩酌をやる。気が明るくなってよし。」、3月9日には「晩食に些か酒に酔う。」などと晩酌を楽しんだ様子が書かれている。ただし、4月1日は転任する仲間の送別会があり、「此の夜、東興楼に於て、酒、量にすぎ、遂にめいてい前後を知らず、」というようなこともあったようだ。5月27日にも同じ料理店で送別会があり、「大酔」とあり、翌29日には「昨日の酒にて終日気分すぐれず、外にも出ず。」、そして6月9日には「気分わるし。暫く深酒を禁ずべし。」と書かれている。

誠氏は、この日記からおよそ35年後の雑誌『盛』（昭和45年新年号）の「酒徒銘言」欄に、「詩人ののみぶり」というテーマで陶淵明、李白、杜甫などの唐代の詩人の飲みぶりを紹介している。李白は千金を散じつくして低俗な世の中の馬鹿らしさを美酒の酔いに忘れ、杜甫は長安の朝廷で疎外されて、毎日のように、春着を質においては長江のほろ苦い酔いを買ったと記す。また、日本のある中国文学研究者は人も知る酒好きだったが、李白が好きで「俺は杜甫のようなケチな酒はのまぬ」と言っておられたこと、さらに、別の先生は「人と酒をのむのは試合のようなものだ。のめなくなったら、一度吐き出して、またのむのさ」と言って飲まれていたことを紹介している。そして、「私はやはり一人静かに飲む方で、散ずべき千金も無いが、酒で人と試合する気にもなれぬ。」と結んでいる。

・余暇の過ごし方－スケート

昭和8年12月19日に当地の遊びの一つとして、溜氷（こおりすべり：スケートのこと）をする人が多いことを記しているが、12月28日には、友人の小竹君と八木君とともにスケート靴を買って（価格三元五角）、北海公園に滑りに行っている。はじめは慣れないので、椅子を持って滑り出すが、手を離して滑ることができるようになったと書いている。翌日そのせいで身体が痛くなったと言いながら、その翌日の30日、そして大晦日の31日にもスケートをしている。相当気に入ったのだろう。滑った北海公園は紫禁城（現在故宮博物院）の西にある。北海公園の南には中南海があり、現在中国指導部の要人が住んでいるところである。

・演劇・映画

誠氏は中国古典文学の研究だけではなく、演劇や映画にも大変造詣が深かった。『北平日記』には北平留学中の約1年5ヶ月の間に京劇などの観劇が22回、映画鑑賞が27回記録されている。単純に計算すると月に3.3回である。見る映画はアメリカ映画や日本のものが多く、中国映画は場合によっては厳しい評価である。観劇は戯院と呼ばれる劇場へ行った。誠氏は北平留学から43年後の昭和53（1978）年11月から翌年の1月にかけて西日本新聞に50篇の随筆を書き、『秋から冬へ』という小冊子にまとめている。その中に「京劇」と題する一文があり、冒頭には、「私はもともと芝居が好きだから、（北平留学時代には）京劇にはたびたび通った。」とあり、当時の上演の様子として、「（夜の）11時過ぎになって、やっと、その日の目当ての、美しい女形が現われる。まるで夢のようであった。」と書いている。この随筆を執筆したのは文化大革命（1966～1977）が終息した翌年であるが、末尾は「昔のような名優の華やかな舞台が、また観られるかどうか。」と結んでいる。同じ随筆集には「築地小劇場」という短文も収められているが、そこには「東大の学生時代は、毎月築地小劇場にかよった。それは私にとって教室の延長のようなものだった」、また、「歌舞伎」と題した短文には「学校の教科書を劇場に忘れ、恥かしい思いで取りにいったこともある。・・・ずいぶん歌舞伎も見尽くしたが、・・・」とあって、芝居好きだったことを述懐している。ただし、歌舞伎に対しては「俳優にも定年制をしいたらいいと思う。」と厳しい意見も述べている。

・中国で出会った人々

誠氏は留学先で多くの中国の文化人にも出会っている。

周作人（1885 ～ 1967）は浙江省紹興市南水江の人で、『阿Q正伝』などの小説で知られる魯迅（周樹人）の弟。1906（明治39）年に政府から派遣されて日本に留学。法政大学・立教大学で学び、辛亥革命（1911年）の時に帰国した。1924年から北京大学東方文学（日本文学）系主任教授に就任。兄の魯迅とともに「文学研究会」を組織した。日本文化に造詣が深く、『古事記』を翻訳している。『北平日記』昭和9年9月30日条には小川環樹氏と訪問したことが記されている。戦後は日本の協力者として冷遇され、文化大革命（1966 ～ 1976年）の際に自宅に軟禁され亡くなった。誠氏には『碧巌録』から引用した言葉を書にして贈っている。それは掛け軸として表装されて、現在当館で所蔵している。

兪平伯（1899 ～ 1990）は浙江省徳清の人。国立北平清華大学中国文学系教授となり、『紅楼夢』の研究で名高い。1935年（昭和10年）2月26日に清華大学で銭稲孫氏の通訳で目加田誠氏と会見し、その内容が『北平日記』同日条と『目加田誠著作集第八巻』に収録されている。会見では、『紅楼夢』を初めとしてさまざまな文学作品や作者について議論が交わされた。目加田誠氏が当時最も尊敬していた中国文学者で、日記には「実に嬉し。嬉しくてたまらず、初めて之程心にふるる話をききたり。」と興奮した様子を書き記している。兪平伯氏の『紅楼夢』研究の成果である『紅楼夢弁』（上海亜東図書館出版1923年）は現在当館でも所蔵しているが、『北平日記』昭和9年6月20日条に誠氏が購入したと記されたそのものであるかはわからない。『北平日記』では、6月24日条に「兪平伯の『紅楼夢弁』よみ了る。」とあり、400頁を越える中国語の本をわずか5日で読んでいる。

銭稲孫（1887 ～ 1966）は浙江省呉興の人で、父が外交官であった関係から中学校卒業まで日本で暮らした。後にイタリアに渡りローマ大学を卒業している。中国では北京の多くの大学の講師を歴任し、1939年には北京大の復活と共に本部秘書長に就いた。日本文学研究者及び翻訳家で、『万葉集』や『源氏物語』などを翻訳したことで知られている。大の親日家で目加田誠氏を初め、多くの日本の留学生の支援をした。前述のように、誠氏は昭和9年11月11日から帰国する昭和10年3月4日まで銭氏の自宅に寄寓している。『北平日記』昭和9年11月11日条には、誠氏が小川環樹氏ら6人に手伝ってもらって引っ越し、その夜は誠氏が手伝ってもらった人々と銭稲孫氏を招いて宴会を催したことが記述されている。さらに、昭和10年2月3日は誠氏の誕生日に当たるが、茶碗蒸しとアヅキ飯を出してもらっている。このように日本人の世話をしたが、戦後はそれがあだになり文化漢奸として3年間獄中生活を送った。しかし、その後は晩年まで翻訳を通じて日本と関わりを持った。

魯迅（周樹人）（1881 ～ 1936）は周作人の実兄で、小説『阿Q正伝』などで有名な作家である。周作人同様日本に留学している。当時の支那新文壇の巨星と評価された。目加田誠氏は留学先の北平を離れる昭和10年3月21日に上海で小川環樹とともに会っている。『北平日記』にそのことは書かれていないが、誠氏の随筆集『随想秋から冬へ』で触れられている（註6）。また、目加田誠著作集第四巻にも書かれていて、それは書籍化された『目加田誠「北平日記」』の最後に附録として再録されている。誠氏の魯迅に対する感想は、「魯迅さんは小柄な人で、胸をそらし、入り口のドアを押してずっと店の奥まで入って来た。弟の周作人さんとまるで違い、むろんどちらも強い人だと思うけれども、周さんがまるで渾然として玉の如くにこやかな人であるのに対し、魯迅さんは抜き身の槍を下げている様な気魄が感じられ、かえって何か痛々しい気がした程である。」と記す。

5．まとめ

以上、『北平日記』に記された目加田誠氏の生活ぶりをみてきたが、家庭教師を付けて学んでいる様子や、極めて多くの文献を読んでいること、勉学以外の北京での生活の様子などが活々と描かれている。昭和8（1933）年から10（1935）

年頃の中国といえば、日本軍の侵攻や満州国の帝制実施などがあり、北京もさぞかし殺伐として厳しい統制が行われていたのでないかと考えるし、実際中国人にとっては厳しい時代だったと思われる。『北平日記』は誠氏の生活を知るだけでなく、当時の北京の状況を知る資料としても極めて貴重である。

目加田誠氏は論文や専門書を数多く残されたが、専門家以外の人でも理解できるようにわかりやすい訳を心がけたとされる。中でも『詩経』国風周南「桃夭」訳は有名である。

「桃之夭夭　灼灼其華　之子于帰　宜其室家　」という漢語がどうして

「桃は若いよ　燃え立つ花よ　この娘嫁(こゆ)きゃれば　ゆく先よかろ」（註 7）というような訳になるのか門外漢の筆者にはとうてい考えつかないが、リズミカルで若々しい調子になり、口にしやすく、一般の読者にも理解しやすくなる。

また、随筆も多い（註 8）。さらに、晩年目を患ってからは短歌に親しみ、『残燈』（註 9）と題した短歌集を出版された。随筆の文章は時に切々として読む者の心に迫り、『残燈』の短歌は物悲しい。九州大学で直接誠氏の教えを受け、筑紫女学園大学名誉教授の故松崎治之氏が生前尊敬の意を込めて「目加田先生は文学者ですもんねえ。」と語られていたことが思い出される。

ふるさとラボでは誠氏の蔵書だけではなく、目加田さくを氏が所蔵した日本古典文学関係の書籍も配架している。それらのページをめくると、誠氏、さくを氏のメモに出会うことがある。つい感激してしまう。偉大な研究者の書籍を所蔵していることが誇らしい。

謝辞

本稿をなすに当たり、ふるさとラボで書籍の整理作業を担当している佐山照子、波佐間玉恵、前之園貴美子さんに『北平日記』内容の確認と原稿との照合をお願いした。記して謝意を表したい。

【註】

註 1　九州大学中国文学会（代表　静永健）（編）2019『目加田誠「北平日記」－一九三〇年代北京の学術交流－』中国書店

註 2　九州大学中国文学会編　静永健主編　2022『目加田誠北平日記』鳳凰出版社

註 3　読売新聞政治部 1989『平成改元』行研

註 4　中国清代初期（17 世紀）の怪異小説。作者は蒲松齢。

註 5　中国清代（1644 ～ 1910）中頃の長編小説。作者は曹雪芹。

註 6　初出は昭和 53 年 12 月 13 日西日本新聞

註 7　目加田誠 1983『定本詩経訳註（上）』目加田誠著作集第二巻　龍渓書舎

註 8　註 1 に記した著作並びに 1966『洛神の賦』（武蔵野書院）等。『目加田誠著作集』の第四巻・第八巻（龍渓書舎）にも多く再録されている。

註 9　目加田誠　1993『残燈』石風社

【参考文献】

橋川時雄編 昭和 15 年（民国 29 年）『中国文化界人物総鑑』中華法令編印館（復刻 1972 名著普及会）

山田辰雄編　1955『近代中国人名辞典』財団法人霞山会

写真１　『北平日記』

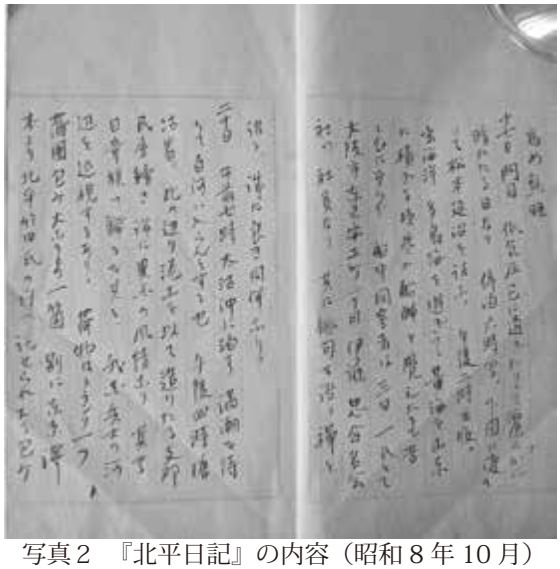


写真２　『北平日記』の内容（昭和８年10月）

No.	年月日	巻数	頁	種別	内　　容
1	8. 11. 19	1	50	映	独逸映画「エムデン」
2	8. 11. 26	2	57	劇	吉祥戯院：金友琴の紅楼夢劇「餞春泣紅」・「長坂坡」・「六月雪」
3	8. 12. 12	2	70	映	トーキー：四郎探母
4	8. 12. 24	3	81	映	真光：「頼婚」-「東への道」のサウンド版
5	8. 12. 31	3	85	映	大飯店グランドホテル：活動
6	9. 1. 11	3	90	劇	中和戯院：「玉堂春」・「金銭豹」・「捉放曹」
7	9. 1. 13	3	91	映	真光：胡蝶（電影皇后）「春水情波」（初めて見た中国映画）
8	9. 1. 24	3	96	劇	広和楼：聴戯（俳優の美声を楽しむ）
9	9. 1. 27	3	97	劇	開明舞台：「長坂坡」
10	9. 1. 29	3	98	映	民会：「忠臣蔵」
11	9. 2. 1	4	102	劇	東安市場：太鼓書を聞く
12	9. 2. 4	4	103	劇	東安市場：太鼓書を聞く
13	9. 2. 25	4	109	映	平安：「四十二番街」
14	9. 3. 1	4	116	劇	中和戯院：程硯秋の「梅妃」
15	9. 3. 3	4	117	劇	吉祥戯院：郝寿臣「桃花村」楊少楼「艶陽楼」劉硯芳「汾河湾」
16	9. 3. 4	4	118	映	真光
17	9. 3. 16	4	122	劇	華楽戯院：富連成の芝居 「応天球」「南海関」
18	9. 4. 25	5	139	映	光陸：デイートリッヒ「恋歌」
19	9. 5. 3	5	142	劇	華楽戯院：　尚小雲「楊貴妃酒」「浙江会」
20	9. 5. 30	5	150	劇	中和戯院：「紅払伝」
21	9. 6. 4	5	152	映	真光：支那映画「良宵」
22	9. 6. 15	5	154	劇	開明舞台：王和霜「蘇武牧羊」
23	9. 6. 28	6	160	劇	華楽戯院：尚小雲「雷峯塔」
24	9. 7. 3	6	161	映	中天：活動
25	9. 7. 8	6	162	映	光陸：「目偶寄情」
26	9. 7. 12	6	164	映	光陸：コールマンの「情聖（シナラ）」アメリカ
27	9. 7. 29	6	166	映	真光：「二対一」（中国映画）
28	9. 8. 18	6	170	映	真光：飛行機映画
29	9. 8. 21	6	171	映	真光：「姉妹花」（中国トーキー映画）
30	9. 8. 22	6	171	映	真光：「屠戸」
31	9. 9. 1	6	175	映	活動を見る
32	9. 10. 5	7	187	劇	哈爾飛：戯曲学校「四郎探母」
33	9. 10. 20	7	192	劇	哈爾飛：「紅楼二尤」
34	9. 10. 29	7	195	映	平安：活動を見る
35	9. 11. 4	7	197	映	光陸：「自由万歳」
36	9. 11. 20	7	203	映	真光：「エスキモー」
37	9. 11. 26	7	205	劇	哈爾飛：周瑞安・章遏雲の「覇王別姫」
38	10. 1. 1	8	217	映	平安：活動を見る
39	10. 1. 2	8	217	劇	韓世昌の崑曲
40	10. 1. 8	8	219	劇	中和戯院：程硯秋の「玉堂春」
41	10. 1. 12	8	220	劇	中和：陸素娟「瀋頭刺湯」
42	10. 1. 27	8	224	映	真光
43	10. 1. 31	8	224	映	活動を見る
44	10. 2. 11	8	227	映	平安：活動を見る
45	10. 2. 13	8	227	劇	協和礼堂：新劇「委曲求全」
46	10. 2. 14	8	227	劇	華楽戯院：富連成の芝居
47	10. 2. 26	8	230	映	活動「クリスチナ女王」（アメリカ映画）
48	10. 3. 2	8	235	劇	芝居を見る
49	10. 3. 3	8	235	映	活動を見る

凡例　映　映画館で映画を見る－27回
　　劇　劇場で演劇を見る－22回

表１　『北平日記』による目加田誠氏の演劇と映画の鑑賞状況

市民ミュージアム　大野城心のふるさと館紀要第２号

発行日　　令和５年３月 15 日
編集発行　市民ミュージアム　大野城心のふるさと館
〒816-0934
福岡県大野城市曙町３丁目８ - ３
TEL　092-558-5000
印刷　　（株）コーユービジネス福岡営業所
〒812-0011
福岡市博多区博多駅前３-13-１林英ビル
TEL　092-411-3681

OCCM